第五部　在学当時の思い出

1　日本医専入学より東京医専創立まで

―元学生本部委員調査係長として―

青山豪一（大正七年卒）

五十周年祝賀会の時記念会館の会場で僕の肩を叩きながら「とうとうこれまでにやったよ」と言って喜び合った三輪君も今や幽明境を異にした。

本郷本富士警察署へ後藤、中本、三輪や僕らが呼出しを受けて、「今日から警視庁の態度が変った」と暗に弾圧を加えるような訓示を受けた頃から考えると、ほんとによくやったものだ。第一回生で本部委員であった僕らは、四百五十のリーダーとして「吾等の戦いは正義の戦いだ、団結こそは最後の勝利だ」とこれをモットーとして終始一貫した。

なかんずく、団長後藤哲雄！彼無くしてストライキは恐らく成功しなかったのではないか？とさえ思われる。

そもそも僕らがストライキを起した日本医専は明治四十五年に医術開業試験制度が廃止せらるるに際し、この準備学校であった日本医学校を経営者磯部検三氏が医専に昇格運動を起されたが、附属病院狭小のため、根津権現の真泉病院（滝沢竹太郎氏）を合併して遂に医専として認可された。

磯部、滝沢両氏が相協力して学校の発展を尽されしならば、指定（無試験資格）獲得を得、吾らのストライキも無かりしかとも思わるるも、磯部氏は滝沢氏への恩義を裏切り、両氏の対立を激化するに至った。

日本医専第一回生として入学の時、百四十名のクラスメートが最終十七、八名となった。ジャーナリズムからストライキを専門にする医学校とまで言わるるに至った。

遂に大正五年四月、卒業試験五日前となり、僕ら第一回生は一同血判盟約をして磯部氏排斥運動を起すに至った。なかんずく三年生は過激なる行動に出でんとした。

学校側は直ちに三十六名退停学処分（十三名退学、二十三名無期停学）を発表した。退学処分たるや当人の一生を葬り去るものであり、人権尊重を奪うものである。我ら熱血に燃ゆる意気と行動力は直ちに学生団を組織し本部を置いた。処分学生に殉じ四百五十名学生総退学を決行した。学生大会の議長は中本富太郎君であった。

かくして新たなる医専設立運動に狂奔した。迂余曲折遂に高橋先生により大正七年四月十一日東京医専設立の認可を見るに至った。その間団長後藤哲雄は矮軀これストライキの権化、反対派の弾圧に屈せず、警察の拘束をものともせざる彼が認可祝賀会の壇上に静かに上がった時の胸中を察することができる。今や五十周年祝賀を待たずして下関市の一角に淋しく逝ったのが惜しまれる。盟友中本富太郎、小野泰弘、安部達人、小川東洋等々眼前に浮ぶ顔、顔。彼等は佐々に続け、佐々に続けと叫んでいる。佐々君こそは本学今日の発展の一大恩人である。君の自愛健康を願うもの、あに僕一人の願いであろうか。同窓六千の祈りである。

終りに臨み、今は無き高橋、佐藤両先生の御冥福を祈ると共に終始御支援、御協力に預りました先生方に深甚なる感謝と敬意を表するものであります。

2　日本医学専門学校入学より国家試験合格まで

松谷　正（大正七年卒）

大正二年四月十日、胸を張って本郷千駄木町の日本医学専門学校に入学しました。校長は山根正次先生、学監は磯部検三先生でした。東京としては珍らしく貧弱な校舎でした。附属病院は神田淡路町の日本病院と根津の真泉病院でありました。教授は修身高島平三郎先生、物理藤先生、化学曲淵先生、体操塩見先生、独逸語吉武先生、川崎先生、五十嵐先生、解剖竹崎先生、二村先生、池田先生、実習華山先生、薬物清水先生、病理長沢先生、細菌丸茂先生、生理永井先生、天谷先生、医化学桜木先生、診断学勝沼先生、内科額田先生、二木先生、武井先生、山田先生、外科中原先生、岩島先生、頓宮先生、前田先生、法医学石川先生、眼科小川先生、小児科清水先生、耳鼻科桑名先生等でありました。大正三年に病理解剖室、外科手術室、臨床講義室が建ち、その翌年芝の小学校の古校舎を買い、木造二階建の病院が建ちました。

私は私立医専の認可も指定も知りませんでした。入学後学生達が毎日の如く話して居るので指定を受けなければ無試験開業が出来ないことを知りました。認可を受けて二年を経過せねば指定を申請することが出来ないこと

も知り、二年後を楽しみに勉強して居りました。学校の理事者も一生懸命に指定獲得に努力して居りますが、学生側も学校を鞭撻しようということになり私の級では河野勝斎君、奥本君が発起人となり蘭契会を組織し、その発会式を根津の演芸館にて開催し、意気大いに上がり、余興として石塚和男君の斡旋で、中村丈夫の説教浄瑠璃節勧進帳があり、前途を祝福して別れました。

余談になりますが、これまでの医術開業試験は大正五年をもって廃止になりますので文部省は全国に宣伝して前期試験の合格者や一般の人の受験を勧誘しました。後期学科の終らぬ級友中村君、滝田君、白木君は受験して合格しました。白木君は合格後私どもと共に東京医専にて勉強して大正七年に卒業しました。私ども学生は寄るとさわると指定の話で勉強も手につきません。その頃基礎医学の先生たちは電車でテクテク学校に来ますが、臨床医学の額田先生は麻布から、岩島先生は芝から、小川先生は池の端から立派な人力車で堂々と来ます。それを見るにつけ早く臨床家になりたく、指定を一日千秋の思いで待って居りました。卒業すれば医師資格を得るものと当然考えて居りました。学校当局もそうなることに努力し学生に向ってそのように思わせて居りました。学生側も誠意を尽くし、苦しいながら一人金五十円近くの寄附をして学校に協力し、指定の獲得を懇請しましたが遂に第一回の卒業生を出す大正五年四月に至りましても指定は得られませんでした。指定が得られぬのみならず善良なる学生指導者を圧迫し、退学処分にする暴挙に出ましたので大正五年五月十六日、保証人の承認を得て血判盟約の連判状により、総退学するに至りました。退学後は団結を固めるため根津の演芸館に集まり、今後の行動について協議しました。私は会計を引受けました。学生団の申し合せにより各県出身の名士に総退学の趣旨を説明し応援を求めることになり、福富義雄君と共に下谷の田代義徳先生と政友会幹事長横田千之助氏を麻布の私邸に、政

友会総務田村順之助氏を芝の政友会本部に訪ね援助を求めました。

争議が長くなるにつれ、血判盟約総退学したにも拘らず、学校側の説得と徴兵猶予の関係で日本医専に復帰した変節者も続出しました。私の栃木県では四年生六人のところ五名復帰し私一人となりました。大正五年九月十三日福富君より日本医専復帰の相談を受けたが、血判盟約総退学した以上日本医専に復帰出来ぬと断りました。福富君復帰し、大正六年国家試験に合格した以来交際を続けて居りましたが昨年逝去しました。

私ども退学級は大正五年九月十一日牛込神楽坂の物理学校を家賃月百五十円で借り受け、東京医学講習所を開設、教務主任は佐藤達次郎先生でありました。私どもは四年生であったので臨床医学の授業を受け、級長は小川東洋君、副級長は私が務めました。臨床実習は外科は順天堂医院で佐藤達次郎先生、佐藤清一郎先生の指導を受け、内科は麹町下二番町の中浜病院で成川権次郎先生の指導を受けました。徴兵猶予の関係で日本大学法科に入学し法律学を勉強しました。月謝金参円でした。医学講習所で四年の課程が終りアルバイトとして月給十二円住込みで日本橋村松町の竹内薫兵小児科病院に勤務して東京医学専門学校の認可を待ちましたところへ、大正七年四月十一日待望の認可を得たので、文部省立会にて四年級の編入試験を受け入学の許可を得、早速徴兵猶予の手続きを取り勉強を続け、大正七年七月二十八日に卒業し、日比谷の松本楼で会費金五円で謝恩会を行ない、教授と級友と別れを告げ国家試験の準備にかかり、同年九月文部省修文館にて国家試験を受けました。受験生は東京医専、日本医専、東京女子医専の卒業生で、基礎医学から臨床医学を毛筆で答案を書きました。実地試験は十月雑司ケ谷の東大分院にて内科二木先生、外科青山先生、片山先生、眼科と産婦人科はくじ引きで決め、私は産婦人科があたり東大の産婦人科教室で白木先生の試験を受け、十一月下旬成績発表になり、中本富太郎君、安部達人君、松

岡信篤君、大森興仁君、宮崎喜一君と私の六名が合格したと記憶して居ります。十二月五日文部省修文館で合格証書授与式があり、その時の親友松岡君の紋服姿が印象的でありました。申し合せにより金十五円を学校に寄附しました。

日本医専に復帰した同級生より一年遅れましたが素志を貫徹し今日に至るも田舎医師として活躍出来ることをうれしく思います。高橋琢也先生が私財を投げ出し、学生救済の義侠と佐藤達次郎先生が順天堂医院の最高の地位にあって学事方面を引受けられた恩愛、学生争議の趣旨を諒解せられ日本医専を辞し、東京医学講習所にて教鞭を取られた三宅先生、清水先生、池上先生、道部先生等の同情、大角桂巌先生、福本誠先生、寺尾亨先生、秋虎太郎先生らの退学生の団結を強め、向う方向を指示したこと、後藤哲雄君がリーダーとして辣腕家の磯部検三先生の説得、圧迫、暴力等を排して学生団の団結を強固にしたこと等に対し東京医学専門学校創立功労者として厚く厚く感謝致すものであります。

3　創学当時の思い出

高畠秀勝（大正八年卒）

大正元年九月、日本医学専門学校が文部省の認可になった。その時入学したのは理事長佐々氏、常務理事であった三輪氏らである。私は翌二年四月第二回生として入学したのである。

田舎の県立中学を卒業して上京し、専門学校に入学して驚いたのは余りに学校が貧相であるという事であった。校舎も粗末、運動場も狭い、設備も不充分、こんな所で四年間勉強するのかと思ったが、しかし医者になるのが目的である。学校が粗末でも医者になればそれでよい。立派な学校を卒業すれば必ず偉い医者になれるとは限らない。貧弱な学校を卒業しても世の中へ出て立派な医者になっている人はいくらもある。「そうだ、私もうんと勉強して人に負けないような立派な医者になろう。」こんな事を考えて毎日通学し勉強していた。

当時校長は山根正次氏、学監は磯部検三氏で、学生監は塩見後備中尉であった。磯部氏が一人で学校を切り廻しており、学校の事に関しては絶対の権限を持っているような状態であった。

入学して、一カ月余り経った頃であったと思う。私どもは体操の時間に塩見先生の訓練を受け、ほとんどそれが終りになって一同運動場に整列した。私は突然に塩見中尉に質問した。「先生、私どもが入学して一カ月余りにもなりますが、まだ校長先生には一度もお目にかからないし、一度も学校へお出になった様子はありませんが

一体どうしたことなんです。」塩見先生はちょっと困ったような態度に見えたが「高畠君、後で私の所へ来てくれ給え、君に話したい事があるから」という返事であった。私は塩見先生の所へ行った。曰く「高畠君、あんな事を皆の前で言わんようにして下さい。校長は事情があって今朝鮮に行っておられるが仕事が終ればお出になるだろう。」と言って別れて来ました。すると常務理事を永くやっていた佐藤憲二郎氏の実兄に当る菅野憲一郎君というのがおって私と同期でしたが、早速と私の所へやって来て「君良い事を聞いてくれた。実は私も不思議に思っていたのだ。何か訳があるかも知れないよ、一つ色々と調査して見ようではないか。」直ちに意気投合し、二、三有志と相計り蘭契会なるものを作って間々学内の模様を調べることにした。昼は真面目に登校して勉学し、夜になると所々に集って教授の事、学問の事、附属病院の事などを調べ始めた。私どもがこそこそと色々の事を調べているとその事が学校の方へも段々と知れて来たと見えて今度は反対に学校の方、つまり磯部氏の方から吾々の行動を監視するようになって来た。向うの犬と言うのが私らの同期の河野勝斎君や八木君らは始めは吾々の仲間であるような顔をしてちょいちょい会合に出席していたが段々と犬らしい事がわかって来たので、私どもも大いに警戒するようになったものだからはっきりと向うの人間になってしまった。それから永い間、或いは学校当局の誠意を疑ってみたり、時には大丈夫かなと多少信用してみたりして時を過した。そのうちにいよいよ駄目らしいということになってきたので磯部氏の経営する淡路町の日本病院へ私どもは出かけて行って直接磯部氏の口から学校の状態、文部省の意向並びに彼の信念等を聞いた。二階の大広間に磯部氏と吾々代表数人とが対座した。磯部氏の側に番人の八木君が控えた。さてこちらからも色々の質問を出したが磯部氏は青ざめた顔をして幾分震えた声で何とか申し訳的な返答をしているのだがさっぱり信用できそうもない。何とかならないもの

かと吾々も心を痛めながら時を過した。

私どもが三年生になった時である。馬詰君、原君らの組が入学して来た。その前クラスには波津久君、須藤元君などという元気な血の気の多い連中がいて、学校当局の不誠意に業を煮やし、とうとう翌大正五年五月一日吾吾が四年生になった春にストライキとなり、四百五十名の学生が血判と共に総退学してしまったのである。学園を去った私どもは直ちに学生団を作り、その本部を本郷西片町の西濃館に置いて毎日毎日活動し、東京医専を作るべく努力した事は前にも述べたことがあるので詳しい事は記述しないが、学生団には会計課があって団員から出し合った会費で本部員が食事をしたり都内外を歩き回ったり、活動写真館を借りて演説会を催したりしたのであるが、その際の会計に幾分疑問があるのではないかと疑われ、時の会計課長前四年生の中本君、会計課員四年生の高畠、三年生の石川君の三名が本富士警察に呼ばれて帳簿の監査を受けたこともあった。もちろん何等やましい話がないのですぐ返されたが、色々の事があった。大正五年の秋に物理学校を借りて医学講習所を開設し、そろそろ医学の勉強が始まった。物理学校は夜間の学校であったので昼の授業には借りることができたのである。その頃都内の学識者、有力者等を招いて講演会を催し、吾々の現状を訴えて東京医専設立にご尽力を願ったものだ。その際の弁士には原氏、並河氏等によくお願いした事を今も覚えている。懐しい思い出である。

その年の夏、私は少し健康を害したので故郷へ帰って八カ月ばかり静養した。翌七年四月上京して新校の卒業試験を受けさせて下さいと願い出たが、君は出席日数が足りないから駄目だと池上教授に堅く断わられて、とうとう翌八年卒業という事になってしまったのである。従って六年秋以来の本部の行動には関係していないのでその後私の名は蒸発してしまった。

4　日本医専総退学から東京医専創立まで

寺　師　順　一　（大正九年卒）

僕は大正二年日本医学専門学校（千駄木町）に入学した。当時は医学専門学校と言っても全く殺風景で何等の設備もなく、名は専門学校と言うけれど唯名ばかりであった。この前には日本医学校と東京医学校との二つの医育機関が私立として存在した。卒業生は国家試験を受けて医者になる制度を政府が医師の向上を一段と引上げる意味でこの普通の医育機関を廃止せしめて専門学校程度以上のものにするというところから、自然この二校は廃止する運命となったのである。二校合併してこの専門学校が設立せられた。

当時、私立専門学校としては半民半官的な慈恵医専があった。東京医学校は滝沢で、日本医学校は磯部検三という人が設立者で、合併後は磯部が理事長と言って滝沢は自然下積みになってしまった。ここに問題がある。この二勢力の対抗が自然学生に波及するのは当然と言えよう。磯部と言う人は頭は五分刈で半白、強度の近視眼でしかも半肢がビッコで絶えずステッキをつき、和服姿のひとかどの親分的頑固な親爺であった。滝沢は余り接する機会がなかったけれど磯部より高年で少しグズグズしたスローモーの男のように思われた。磯部は神田淡路町

に日本病院を持ち、滝沢は本郷八重垣町に昔は根津の遊廓だった建物をそのままに病院にした真泉病院を持って、この二つが附属病院という事になっていた。僕らはこの日本医専に入学したものの卒業しても国家試験を受けなくては医者になれない。いわゆる学校そのものの設備その他からして無試験で医者になれるという他の専門学校と異なり「指定」校という資格をもたなかった。

当時学生は実に不安な話で、他の官立専門学校即ち千葉、長崎、岡山などの各専門学校卒業生は黙っていても医者の資格が得られたのに男では僕らの学校たった一つが国家試験を受けるという重荷があった。何分にも学生はいずれかの官立学校を受験したが不合格になった者、いわゆる浪人組の一団である。頭脳の悪い連中が国家試験を受けなくてはならぬ事は全く恐怖に近いものがあった。そこで吾々は何としても卒業までにこの文部省の指定をとりたい。そして安心して卒業後医者の資格を得たいという願望のある事は当然であろう。そのため学校当局にお願いして一日も早く設備を完備してもらい、文部省の許可を得たい。学生の中から委員があげられ当局に毎日請願して設備せよ、設備せよと迫った。しかし当局も一生懸命努力してはいるらしいけれど文部省の要求する通りの進展を示さぬ。吾々学生が望む無試験資格の指定校としての許可は容易に下って来なかった。

学生は第一回の卒業生を来年度出す事になった。四年生は段々騒ぎ始め、各学年のクラス会を開き、全校学生大会まで発展して来た。何分学生は年齢からして種々雑多で代議士選挙に出馬し落選した者、小学校長経歴のあった者、活弁士だったものなど色々であった。いわゆる一、二回官立学校受験の浪人組の集団で、これらの弁論や意見は全く完成に近い一人前の社会人みたいな者が多数であった。学生団結束力も偉大であった。卒業期日の切迫につれ連日大会を開き、その委員は選ばれて淡路町日本病院や文部省を訪問し、陳情して、運動は熾烈を極め

て来た。遂に全学生大会は即決総退学の挙に出るに至った。

各クラスに分れて連判状を作製し、各々が小指を切り、連判状に捺印した。吾々はあくまで血をすすり合って目的貫遂を誓い合ったのである。今頃血をすすり合うなどと言うと何かヤクザ仲間のやるような話に思うだろうが、当時の若者はいわゆる大和魂と言おうか、日本古来の武士道と言うか、一度誓った事には誰が何と言おうとも一丸となって強固な団結となったのである。当時の血判状はわが大学の学宝として現在も大切に保存せられている。若い血気にはやる四百余の乱暴者の一団と笑っちゃいけない。赤穂義士四十七名が苦難を打破し目的貫徹に邁進したその魂とほぼ似通うものがある。

総退学と言いながらもちろん当局の奮起を促し急速に設備万端を整えて文部省の指定を獲得するよう努力を促す一手段の筈であった。吾々下級生では折角受験して入学しながら上級生の犠牲となって退学するなど、そんな考えでやった事でなく、あくまで当局の善処を促す手段としての挙に出たのであった。ところがこの血盟団の中から「卒業して国家試験受験の希望者があった事」と当局即ち磯部派の学生ゴロツキ団があった事は純情な大多数の学生を益々憤らせるようになった。連日会合を開き、保証人大会は開かれ、文部省に押しかけ磯部の淡路町日本病院に押し寄せた。そして学生団本部を本郷の信濃館に置き、鈴本亭と言う寄席を借りて学生は籠城した。戦いは益々熾烈、激烈となり、学生はいきり立ってきた。文部省に高田文部大臣、次官、参政官、副政官、松浦鎮次郎専門学務局長等に対して吾々委員五名は対談した。全学生は文部省構内広場に集結して気勢を挙げる。それが石油缶を打鳴らし「偽教育者をほうむれ」、「爆弾」などの文句を大書した幟を打立て騒ぎ、この時警視庁麹町署から四百の警官をくり出し大乱闘を始めた。当時の警察側の指揮官は長谷方面監察官「旗をぶんどれ」「いや

渡さぬ」と双方八百の大乱闘となった。須藤元君は「大臣、吾々学生だってマッチのすり方や短刀のぬき方は知っていますぞ」。寺師（旧姓迫田）は「大臣、なぜ吾々を罪人扱いなさる」「いや、何も罪人扱いにしない」「いや罪人扱いだ。その証拠に吾々の背後にこの腕ぶしの強い私服警官を立たせているのは何たる威圧ですか」このような問答を繰りひろげ、当日遂に各警察に拘置された学生は約百名、また淡路病院でも警官は家内に入れないと門を堅く閉ざし警備していた。四百の学生はワッショイ、ワッショイと門を押し破り、これを焚火にして焼芋をかじって大騒ぎ。この間委員は磯部と対談していた。それを例の八木（磯部の子分）以下の磯部派は護衛しているという有様。当日も約百名の拘置者を出した。僕は八木派（磯部の子分）と転向組が約五十名学校の一室に集まって卒業試験の最中の所に単身乗り込み、「馬鹿野郎ども、君らの如き破廉恥漢どもの命は一人残らず僕が貰った」と大喝一声。その時逃げまどう者をなぐってやった。その後警察では駒込署に僕を連行、それから警視庁に移し指紋をとり、写真を撮した後未決監にぶち込んでしまった。そして家宅侵入罪、傷害罪、恐喝罪として四十五日間市ケ谷の未決監に入れられた。また同級生の波津久統重君の父はわが子がストライキをやって退学され、いつ医者になれるか判らぬと言って世間に申し訳ないと首をつり死んでしまった。僕も養家先を出された。このような家庭的悲劇は数知れない。時日の経過と共に学資の送金が絶えてしまうという有様で、医者の代診に行く者、現在のアルバイト学生同様の生活を続けた。委員はほとんど信濃館に閉じ籠って運動方針を協議している。保証人会では、この代表の奥宮海軍少将（横須賀市長）や大角桂巌（弘道館柔道師範）ら諸氏が学生の前途打開のため連日運動を展開している。

時の政府は大隈重信総理大臣を首班とする憲政会内閣であり、原敬を首班とする政友会は在野党である。この

他に国民党として犬養毅、尾崎行雄、伊東知也、佐々木象山等の諸氏の時代だ。この政友会に属する院外団総帥たる高橋琢也先生が吾々の救済者として現われるようになって始めて学生も活気づいて来た。牛込神楽坂の物理学校を借りて東京医学専門学校の基礎を築き、学生と行動を共にした清水茂松教授、緒方知三郎教授、井上通夫教授はじめ多数の硬骨純情の先生方が授業を続行された。順天堂主の軍医総監男爵佐藤進先生はご養子の佐藤達次郎院長はじめ全順天堂の部長クラスの諸先生が教授として授業を続行されていた。東京在の有名人という有名人はことごとく東京医専学生後援会員として記名捺印してもらった。頭山満翁などしっかりやれと親しく激励されたし、三井、安田、三菱等の大財閥のところなど救済をしてくれと廻った。とにかく各方面に手分けし歴訪して善後処置を頼んで廻った。公開演説もたびたび聞いて日本医専当局の悪を痛罵し、文部省当局の誠意のなさを社会民衆に訴えた。大町桂月先生や、伊東知也、佐々木象山氏など、また大野伴睦氏は当時明大の学生で、政友会院外団員として毎度吾々と共に演壇に立って憲政会内閣の文部政策を批難攻撃したもので、佐藤憲二郎ら諸君はそれ以来大野氏とは交友の間柄だった。

高橋琢也先生は自分の全私財を提供して二十数万円を投じて下さった。骨董品を上野で競売して下さった。吾吾はその店番もした。高橋先生の主催する明治絵画会の会員諸先生は無料で日本画数百点を提供して下さって、僕は江並猛、佐藤憲二郎と三人、湘南地方の開業医廻りをして売り歩き、横須賀の或る料亭を借りて競売会を開き四千数百円を得た。このようにして資金は集められ、第一に大久保の土地を入手し、その後校舎の建設にとりかかった。麹町の中浜東一郎先生所有の回生病院を買って附属病院を建てたりして着々と学校の体系を整え始めた。その間にせっかく建て始めた校舎は暴風で二回も倒壊の憂き目に遭った。この間に四百の学生は前後四年間

を徴兵猶予するため明治、日本、法政、専修等の各大学に仮に籍をおいて猶予していたのを憲兵隊に嗅ぎつけられ、東京各大新聞は「四百の非国民」の大見出しで批難し始めた。そして四谷の憲兵隊にことごとく拘置されてしまった。ここまで来ると当局も四百の浮浪人を出し、罪人を出す事の将来社会に及ぼす影響の大なるを思い、当時の陸軍大臣大島大将と高橋琢也先生の会談となり、遂に急激に当面が打開れて認可を得、二年後大正九年四月十三日文部省の指定校となったのである。ここにおいて初めて過去五年間の艱難辛苦の道は遂に打開されたのである。僕らは校庭に集って心底から、にじむ涙を抑え、相抱き合い泣いた。そしてあくまで守り続けた正義の旗印のもと血判状のもとに誓い合った真の友達は救済されたのである。このようにして我が東京医学専門学校は誕生した。

財団法人東京医学専門学校は理事長として高橋琢也先生、校長は佐藤達次郎先生と言う主脳部があって、その下に苦難を共にした理事や教授があり、学生は真の兄弟として校運の進展になおも努力した。現在の佐々理事長はじめ故三輪新一、故佐藤憲二郎、馬詰嘉吉名誉教授、原三郎名誉教授らの諸先生は東京医専と共に一生をささげて運命を共にした我が大学の大黒柱である。学生団長として初代後藤哲雄、二回団長が中村丈夫、第三回寺師、第四回は江並猛と言うようにして共に生死を誓い合った。真の兄弟であった。後藤哲雄君は初代学生団長として四百余の学生団員の指揮にあたった。なかんずく青山豪一、古川道之助、三輪新一、中村丈夫、大沢龍雄、小谷無違、小野泰弘、宇津木斌、本保秀、中川兵次、緒方晴逸、尾形文夫、酒井敏雄、須藤力三、原三郎、波津久統重、早川一郎、沖縄の嘉陽宗正君などの豪傑組をよく統率して非常に正義感の強い男たちだった。

5　大正四年から九年まで

（千駄木、神楽坂、東大久保）

馬詰嘉吉（大正九年卒）

大正四年の春、日本医専に入学した私どもは八十名ほどであった。今の日本医大はすばらしい大発展であるが、当時は規模の小さい学園であった。

校長、生理の天谷千松先生は飄々として天衣無縫の方、物理の藤教篤先生は若い篤学の士、化学の曲淵累章先生は旗本の裔、自訳のアルノルド化学書をお持ちになり、低い声でお読みになった。ドイツ語は椎名十三、筒井の両先生。椎名先生は東北の方で、いずれも後に地方高校の教授に転任され、二年になって畑一枝先生が担当された。解剖のうちで原正先生が一番印象に残っている。のちに長崎医大に転ぜられたが教育に熱心な、しかも厳格の方であった。二村領次郎先生は立派な学者であったが神経がピリピリしていた。

私たちは一時間しか教わらなかったのであるが、若き日の長沢米蔵先生の風姿が目に残っている。小さくはあったが新築の病理解剖室から白衣の先生が現われ、野口英世もかくやと思われた。今曼鑠として麗筆を揮われている。また俳人として高名である。

高校受験準備組も数名あったが、七月に一学期の試験が行なわれるのでズルズル居残ることとなった。二学期となると、学校当局の非を鳴らす声が低学年にもとどいて来たが、真相をよく知らぬので比較的のんきに通学した。

ところが二学期も終りの十二月十八日の午後、全学生集合すべしとの檄が飛んだ。上級の熱血の士が壇上から学校当局の非を叫び、全学生団結して磯部理事退陣の要求等々の声が講堂内に渦を捲いた。私たちにはよくは判らなかったのであるが、やはり若い血は燃え、興奮のるつぼに自らまき込まれて行った。その当時は「暴虐磯部」と教えられたが、後日になって考えてみると、氏も力の及ぶ限りは尽瘁され、誠実の士であったのだと思われるようになった。見解の相違のためにあのような結果が招来したのであろう。

先年S先生から次のような話を承わった。「磯部さんはいつも袖なしのつつっぽの着物であったでしょう。あの方は幸徳秋水の思想に共鳴していたので常に刑事に尾行せられ、袖が長いと捕まりやすいので筒袖が習慣となったのです。その経歴のために磯部が学校をやっている限りは指定をやらぬと言うのが文部省の方針であったそうですよ」との事であった。しかしあの当時は若い血潮が正義、正義と全身を駆けめぐっていたのである。

翌十九日の正午から学生大会が開催、三カ条の決議が行なわれ、各クラスそれぞれ署名血判の議が決定した。教室に戻るとメス、アルコール、脱脂綿、白い奉書の巻紙がもたらされた。いよいよ連署血判の時が来た。サアという声に一瞬血の気が引いた。直ちに進んで出てゆく人もなかったので、これではいかぬと思ったのでまず署名血判した。その時の写真を見ると原三郎、早川一郎、佐藤憲二郎の諸君の名前が先の方に見られる。部屋は殺気立っている。興奮のあまり尿意を催したので室外に出た。冬のこととて外はもう暗くなっていた。二、三人が

いて一人は口内を妻楊子でつついている。どうしたのかと聞いたら「指を切るのは感心せぬので歯齦から血を出しているんだ」とのことであった。今これを書きながら左の拇指の先を眺めた。斜に走る薄い創痕がある。その時のものではあるまいか。その時の大騒動も小康を得、明けて二学年の春を迎えた。内面ではいろいろの事がもちろんあったのだろうが、直接タッチをしていない吾々は泰平ムードであった。勝沼精蔵先生の診断学の名講義などがあった。

忘れもしない大正五年四月二十九日は土曜日の半ドン、群馬出身の原三郎君の提案で館林の分福茶釜を見に行こうと、福岡の野見山巍君外一名で押上から東武鉄道に乗った。車内にランプが灯っているのに驚いた。館林で一泊、翌朝城沼を舟で渡り、勾当内侍の遺愛のつつじを見物、茂林寺で分福茶釜を拝見、さらに太田の呑竜さんを参拝した。一泊の旅行を愉しい思い出として帰宅した。

明けて五月一日、学内には厳しい空気が張り、いよいよ同盟休校の大騒動が始まった。これからの総退学、東京医学講習所、東京医学校設立に至る記事は五十周年記念史に詳述されるので省筆するが、大正五年十二月に刊行した「奮闘之半年」にも詳述されている。これは四年の安部達人、宇津木斌、上村透の諸君が先に立ち、原君などと共に編集委員として驥尾に付した。安部、宇津木、上村は思い出の深い人だが何れも故人となった。

退学生一同は根津の演芸館で連日会合。原君と私が新聞社係となり、学校の非と学生の正義を各社に説いて廻った。当時論客として一世を鳴らした茅原華山氏の知遇を得た。「奮闘之半年」の中に、この騒動の各新聞の題目のみが八頁に亘って載せてあるが、二人が集めたものである。

この間の経緯を省くとして、その年の九月に神楽坂の物理学校の校舎を借り受け、東京医学講習所として発

足、同六年に東大久保の土地購入、七年一月に校舎が竣工して移転した。学生の喜びは非常なもので、狭くともわが家との開拓者精神で、教学一致の勉強が始まり、学校を休んだりする者はほとんどなかった。

大正九年四月無試験検定に指定され、六月に指定第一回生として卒業した。大学の誕生は高橋琢也先生が全財産を擲たれた広大無辺の大慈悲心と、佐藤達次郎先生の高邁なるご人格に基づく教育を施された結果に外ならぬ。また学生の一致団結によって正義、友愛、奉仕、これによって自ら自主の精神が生じた。この創学の歴史によって今日の「東医精神」が育まれた。本学誕生から指定第一回生として卒業に至るまでの恩師の方々について紙数の許す限り述べることとする。

ドイツ語は若き日の道部順、小宮豊隆のお二人、共に今はない。道部先生はゲーテの研究に生涯を捧げた。私は先生から俳句の開眼を受けた。小宮先生は漱石門下の総帥としての風格があった。

倫理は高名な得能文先生。冒頭の講義が「啓蒙に就て」であり、日本医専で高島平三郎先生から流麗な講義を受けていたので驚いた。

細菌、衛生は古屋芳雄先生、白樺派の一員として「地を嗣ぐもの」で文名を馳せ、難しい学問も音楽のように響いた。生理は井上達一先生。講義もむずかしく、どちらかと言うと気むずかしい先生であった。医化学は後に侍医となられた山川一郎先生、温厚そのものの学者であった。法医は若き頃の浅田一先生、クラスの石山隆君が信用されていた。

精神科は三宅鑛一、斎藤茂吉の両先生。共に講義は受けなかった。歌人として茂吉先生には先輩安部さんの紹介で三回ほどお目にかかった。直接の講義は若い林道倫先生、クレペリンなんかは友達のような面白いお話。最

初の講義は「認識」であって、女人を例にひかれた愉快なもので、一同嬉しくなった。

清水茂松先生には二年で薬理、四年で小児科を教わり、教授、教頭、病院長、学長とし、私たちは永らくご指導にあずかり、今日なお先生のご知遇にあずかっている。

緒方知三郎先生には病理総論、各論とも今裕先生の著書で講義をされた。実に判り易い略図を描かれ、難しい病理も面白いように覚えられた。後に佐藤先生のあとを受けて校長となり、遂に大学に昇格させ、本学を学問の香り高い東洋一の学園にと志されたのである。今日なお、老人病学の研究にいそしんでおられる。

眼科は、疾病篇を須田卓爾、機能篇を井上誠夫の両先生にご教示を受けた。私はこの両先生に私淑して眼科を選んだ。昨年から両恩師のご事績を書き続けている。

先生方のことについてまだまだ述べることがあるが、紙数の都合上交友関係にうつる。

日本医専当時、先輩安部達人、同級友原三郎、故吉沢晁と私は日暮里に住み、日暮里組と呼ばれた。安部、原、私は共に短歌を作った。安部は精神科の教授、原は現在名誉教授として創立五十周年史の執筆に没頭している。歌の僚友高沢千里、今井良平は共に早世した。早川一郎君は俠気の士で角力が強かった。卒業後解剖の助教授となったが、今は新潟県で多くの山林を持ち、長男があとを継いでいる。佐藤憲二郎は本学の常任理事として本学の発展に非常に寄与した。名利を遂わず学校、友人のために尽した。洵に忘れ難い人である。鹿児島の佐多正蔵君は大人(たいじん)であった。令息は外科医である。同県には菊野景光、谷山静夫両君が健在。山口亀吉君は都下大泉に住し、令息二人が医師となり共に親孝行である。下小鶴英吉君は令息が慶大を出られ、共に世田谷で開業。石山隆君の令息はレントゲン専門医である。長委三美君（広島）は立派な人であったが惜しくも早逝した。令息は医師

である。明石荘介君（埼玉）のお孫さんは本学に在学、野見山巍君は病気静養中、長男が医師で親孝行、後顧の憂いはないが一日も早き全快を祈る。弁論の雄並河元勝、温厚篤実の土屋政司、戸沢成二、柄沢武雄の諸君ら何れも逝去。土屋君の息は東北大学卒業、柄沢君のお嬢さんもお婿さんも共に医師。ユーモラスな原田次郎君も亡いが、養嗣子が病院を開設した。長唄の名手大出富吉君も数年前逝去。養嗣子は慶応出身の医師。富山の脇坂孝治君も忘れ難い一人である。

徳島から木内盛夫、中谷茂雄、大池頼男、松浦正夫、堀川行雄の諸君と私の六名が入学した。木内君は力行篤学の士であったが惜しくも早世。大池、松浦、共に故人。大池の長男は第二次大戦中に軍医として戦死。中谷君はラバウルで戦死。令息二人が医師となり大活躍。堀川君は元気で令息と共に第一線に活躍。

まだまだ書くことはあるが紙数が尽きた。今日なお健在の士は十二、三名に過ぎない。級友諸君の健康と母校の発展を念じて筆を擱く。

6　指定後第二回卒業生の思い出

村田文雄（大正十年卒）

私たちは大正五年四月に日本医専に入学し、その多くは大正十年に東京医専を卒業したのであるが、当時の紛争の関係で上級からも加わったり、卒業の延びた者もあった。大正五年四月に入学して、すぐ翌月の五月十六日には総退学に加わったのである。入学して直ちに当時の日本医専の状態を先輩の後藤哲雄、中村丈夫、迫田順一原三郎らの諸氏から説明され、学校改革の運動に加わり、大正五年五月一日には血判連署してストライキに参加したのである。入学早々から激しい学校改革の空気の中に包まれ、落着いて勉強する暇とてなく、一カ月で総退学するに至ったのである。その当時から同級の江並猛、荒瀬秀俊、佐藤憲二郎君らは紛争学生団の委員となって大いに活躍した。

私たちは中学を出たばかりで、詳しい法規の事などは知らず、卒業すれば医師になれるものと信じて入学したので、上級生の説明により指定を得なければ無試験開業の資格を得られないと知り、学校経営者の無責任に憤慨し、その当時の現状からみて、この学生運動は当然であると思い、参加せざるを得なかったのであった。その後

物理学校での講習所に入学し、大正七年四月専門学校設立が認可された時に第二年級に編入されたのである。一年上級であった佐藤憲二郎君は学生団活動の中心であった本部会の委員であり、なおその事務所に居住していたので、試験を受ける暇もなかったので私たちの組に入った。同君とはことに親しかった。佐藤君を通じて上級の本部員であった大沢龍雄さんとも親しくなった。東京医専創立に対し、大沢、佐藤両君の功績はまざまざとこの目で見ている。創立及び指定獲得に対する苦心はおそらく正史に書いてあろうから重複は避けるが、私のクラスの思い出を記すことにする。

紛争当時、既述の江並、荒瀬、佐藤君らは大いに活動し、その功績は大きい。なお橋本実尾、加藤正一郎、入隊のため遅れてクラスに加わった増田貢君らも大いに活躍した。永井誠夫君は快男子で、ストライキに大いに活躍し、専門学校創立後初代の応援団長として運動部の発展に尽くした。専門学校創立認可後も学校の建物等はみすぼらしかったが、佐藤校長の運動奨励によって既に運動部はすばらしい成績を出していた。その中から久保清君のような庭球での名選手を出した。私自身は在学当時第一線で暴れる方ではなかったが、卒業後引き続き母校と密接なる関係を続け、及ばずながら母校に尽くし、評議員にも推され、それの議長をさせられたり、同窓会副会長、次いで顧問にされたりしているが、現在元気で生き続けているのは、生化学教授になり、次いで名誉教授になった三坂亮雄君と二人となり、同級生の多くは故人となってしまった。ストライキ当時及び現状を思い、真に感慨の深いものがある。母校発展を祈る一念で生きている。

7　医専認可後入学の第一回の卒業生としての思い出

今瀬英丸（大正十一年卒）

大正七年四月十一日東京医学専門学校が設立認可された。その時第一回の入学許可者百二十名の中に小生も入ったのだ。本校の先輩が日本医専総退学を決行されてから二ヵ年、血判盟約して幾多の艱難苦難を克服して古今に比類なき学園を創設された由緒あるこの医学校に入学できた喜びと、剛健質実なる校風を遵守して学業に精励することを誓ったことを記憶しておる。そして強い団結をもって研学の精神の燃ゆる先輩に取り囲まれた新入生は幸福であった。特に学生団委員長の後藤哲雄氏や佐藤憲二郎氏、天野中佐学生監などには親味の教導を受けた。入学式には高橋塚也先生の訓話、福本日南、大角桂巌、寺尾亨先生など名士の精神的鼓舞演説、佐藤達次郎校長の医学を志すものに対する訓辞など、本校創立の異彩を放つ講話などを拝聴して若き日の全身が引き締って、輝く希望の血が迸しる思いであった。さて、希望を懐いて通学し始めたものの、騒動後の創立当時なので、校舎もまことにお粗末不備。教授先生方もかけ持ちという工合なので休講が多く、いささか学業に物足りぬ嫌いがあったのも止むを得ずと思って過した。

本学中の教授方は（敬称を略す）倫理学得能文、独逸語小宮豊隆、道部順、竹内作次郎の諸先生、基礎学では解剖井上通夫、平光吾一、病理緒方知三郎、生理天谷千松、井上達一、薬物松村茂秀、細菌古屋芳雄、法医浅田一の諸先生。臨床学では内科三宅鉱一、荒井恒雄、池上作三、田沢鐐二、榊原市郎、岩男督、外科松井権平、佐藤清一郎、沢静夫、芳賀栄次郎、小児科清水茂松、眼科井上誠夫、須田卓爾、耳鼻科千葉真一、皮膚科上林豊明、以上の諸先生であった。ポリクリは校舎や講師先生の都合で博済病院、東大病院の外、主に順天堂、明々堂病院などに分散受講した。

大正九年三月いよいよ指定を獲得した時は将来の輝かしき希望に全学生抱擁して歓び合い、グループごとに一団となって下宿や小料理屋で牛鍋をつつき合い、夜の更けるまで痛飲した。小宅でも菅野憲一郎、波津久統重、菊地秋水、佐藤憲二郎、村田文雄の諸先輩と天野中佐の裸踊りまで出て、羽目をはずして喜び合ったことを思い起す。その後いくばくもなくして先輩諸氏が医師の資格を獲得したのであった。

大正七年二月に入学試験を受けた当時の校舎には東京医学講習所の看板がかけてあり、受験発表の時には校舎の一部が暴風で倒壊したりして貧弱の状態であったが、日を追って建設も進行し、まずまず勉学も曲りなりに卒業することになった。しかるに翌十二年九月には大震災に遭って、またまた苦難を繰りかえし、学校当局の懊悩は容易ならず、大変だナと思った。この苦労は今日の大学の発展に至るまで連続の宿命であり、また困難に直面して挫折せず、かえってますます奮迅する堅忍不抜なる東医精神の原動力となって、現在の大学の躍進する基礎となったことと思う。ここに四十五年前本校最初の入学生として当時の記憶を辿って記し、大学の発展を期し、ますます繁栄せられんことを祈って筆を擱く。

8　大正八―九年の頃の事

（本学柔・剣道々場のこと）

田林綱太（大正十二年卒）

当時、学生の必読の新聞は「万朝報」であった。中学卒業近い者は学生募集欄を目を皿の如くにして見るのが当然である。その時に文部大臣認可東京医学専門学校の文字が私の目をひいた。東京医専のその名称が気に入った。それで受験、入学した。指定などの問題は何も知らなかった。敷地は広くはないが、今の北門左側に粗末な木造一棟があるのみであったが、東京医学専門学校建設敷地の大標識が如何にも未来の夢を思わせる新勢力かの如く思われた。間もなく解剖学教室、事務室、また附属病院として博済病院がつぎつぎに建造された。入学当時は前述の教室一つのみで、敷地は草茫々と繁っていたが、一部にテニスコート、相撲の土俵などが立派に造られ盛んに練習され、またそれらは都下学生会の雄とも聞いた。選手の氏名も承知しているが各部の方が書かれようから省略するが、とにかく熱心に練習しておられたことは事実である。当時の学生は一般に意気軒昂であり、信義に徹していた。これがいわゆる新興勢力であることが後にわかった。それは実は某校の学生が既に卒業しながら無試験指定の特典を得られないために、血判連署の上総退学した者であり、それを後に貴族院議員にならし

れた高橋琢也先生の古武士的な情熱の後援となって創設されたものであることを知った。本学建設の学生運動としては愛校会の名で行なわれていた。佐多、江並らの諸氏が会長として熱誠極まる会合が頻繁に行なわれた。愛校会の勢力は各学生の誰もが同一であるのは、のるかそるかの大問題それ自体であったから当然のことであり、異端者のあるはずがない。その内容は雄大な本学の建設、指定の獲得からそれにふさわしい教授選定、学生への賞与などまで討議された。

当時我らには当然唯一無二の本学であったが、社会的には認められない程度の存在であったのに相違ない。特に某校の総退学生とあってはそれも当然かもしれない。しかし他方その経緯事情を知る一部の人は、本学生団の意気を称揚し、進んで力を入れてくれた人も少なくない、前記の高橋閣下、当時の教授団及び一般後援者たちがそれである。中にも当時の教授は順天堂医院佐藤達次郎校長を初めとし、その科長たちが主であった。即ち小児科の清水茂松先生、内科の荒井恒雄先生、岩男督先生、耳鼻科の松本本松男爵、外科の佐藤清一郎先生、婦人科の下平尚先生らがそれである。また当時の生理学教授に井上達一先生、解剖学に井上通夫先生がおられた。有名な駿河台の井上眼科の一族であり、達一先生は運動家で駒込の宏大な屋敷に時折り二十名くらいの学生を連行して優待された。奥様にあれ持って来い、これが足りないなどと怒鳴られた。奥様はさぞ大変なご迷惑をされた事と今でも思い出しては恐縮している。

とにかく意気投合し、一糸乱れぬ学生団と教授団であった。本学建設等の大問題は血判組の上級で苦心話合いしておられるので、私たち下級生の介入する所ではなかったが、私は級長をしていたのでむしろ事務的な面や教授たちとの交渉などが多かった。五十年歳月が流れた今日、小事件などの記憶も薄らいだので省略するが、続い

て解剖学教室、事務室、附属病院として博済病院などが矢継早に建築され、小規模ながら一応の形態が形成された。教頭に西勇雄閣下が就任されたが悠々たる体軀で「田林、お前何をカンカンしているか」などと笑を含んで仰せられると、さすが癇癪持ちの私でも自然に頭が下った。

私事に渉って恐縮だが、当時の皮膚泌尿器科の教授は土肥門下の駿足で、順天堂の科長上林豊明博士であったが、私を後継者と一人決めされていたらしく、大変な恩顧を受け、卒業と同時に外国に追いやられ、敗戦ベルリンで大変苦労した一幕もある。恩師は心臓喘息が持病であったので、惜しい哉、大戦物資欠乏の最中の大正十六年に昇天された。そのことについて私の最も遺憾とすることは、上林家は大荘内雄藩のご典医であり、後将軍家の御医師に推薦されて江戸に出た名医家であるが、後継者が無かったのと、いろいろの家庭的事情のため単に私の苦心のみでは恩師の家を医家として残すことのできなかった事は門下筆頭の私の不甲斐なさであり、深くお詫びをしなければならない事である。私は唯々研究にこれ勤め、恩師に肖った業績を積み、せめても上林教授の業績が今日なおここにある事を同学の士に認めて戴きたいと勉めた。

なお、浅学菲才の私には学問上の事はお恥かしい次第であるが、本学に残した唯一つの事は柔、剣道々場に関する事であろう。

大正八年入学間もなく同好の士松田重雄、宍戸忠太郎、その他多数と相謀り、剣道部を創設し、例の青天井道場、草むらの中で、「やあ」「おう」の掛け声を天に響かせた。寡黙の佐藤校長は運動好きの人でありながら見て見ぬふりをしておられた。テニス部、相撲部などは既にあって、両者とも東京学生界では、既に名を成していた。

秋頃になると近所の悪童どもが伸びた草を束ねて輪を作り、稽古の私らがそれにかかって倒れるのを見て拍手した面憎い事などもあった。秋晴れのある日、白馬に跨って悠々と境内に乗入れるのはもちろん校長以外にはない。稽古中の私に馬から降りて目くばせし、小声で何か言いかけられた。装面を脱ぎ、校長に敬礼し近づいた。校長は「剣道には道場がなければならないではないか」と言われた。「私は無いからやむを得ず……」と答えた。先生は笑を含んで「作ってやろうか……」と言われた。だが小声で聞き取れないしまた恐縮して聞きかえす事もできなかった。唖然とした私を後にして事務所の方に静かに行かれた。一週間ほど過ぎた頃、半纏姿の請負師風の方が私の所に来て、校長先生から剣道々場を建てるように言われたが、どんな風にすればよいかとの話であった。場所は隅の方にして、土台と敷板の厚さと敷板の下に入れるスプリングが道場の生命である事を話した。間もなく八間に四間、神殿付きの道場が与えられた。私はその半分を柔道、半分を剣道々場とした。これで本式の柔剣道場ができ、部員の意気天を衝くと共に寡黙の校長の態度に一同は心から感謝の意を捧げつつ、精励これ励めた。その結果剣道部の黄金時代を築きあげた。柔道部においてもちろん当然の事である。

この道場はその後学校当局で拡張したが、昭和十五年ごろさらに拡大して柔剣道場及び相撲道場となったが、戦争が苛烈となった時に軍の命令により木造建築は破壊することとなり、学生たちの手により取り壊すの止むなきに至った。その時学生Y君は天井柱の落下により一眼を失う不幸にも遭い、その時の作業の指導監督者であった原教授を痛嘆させた。

敗戦後道場を再建せんと、佐々理事長に意中を申し出た。先生は、さてこれから大東京医大の建築を計画しなければならないので、その設計のでき上るまで待つようにとの話もあったが、私は学生乃至部員の精神的教養に

時を待つべきではないとし、在来の隅地ならば設計上にも支障なかろうとして認めて戴いた。またもし大計画の支障になればどこにでも移築する事を約した。ついでに第一号の資金に先生に一ヵ月分の俸給の寄附を願いたいと虫のよい事を申し上げた。先生は莞爾として許された。かくして私は各教授、先輩を訪問して同様のお願いをして喜捨を仰いだ。もちろん私も我が妻も喜捨した。その芳志の名札は今もって大切に保存してある。

今度は焼失する事のないようにとブロック造りとした。それが第二回目の道場建設であり、一昨年までの道場である。他方、宿願の東京医大の大計画が完成し、五十周年記念会館中に屋内道場が設備される事になったため、上述の如く苦心して建造した道場は喜びと涙の交錯する中に、自分らの手で今日の大道場に移転する事になった。これで東京医科大学のある限り、五十周年記念会館の存在する限り、恐らくは二百年以上三百年もこの立派な柔剣道場は永遠に残る事を確信する。かくの如き経過を辿って、先輩、並びに私の願望は本学理事者の理解と御厚意によって永く永く伝承せられる事は疑いない。多謝謹言すること云爾。

9　東医在学当時の思い出

小暮行雄（大正十三年卒）

父の仕事の関係で通学していた大分県立大分中学を卒業するとすぐ上京、家庭の事情で修業年限の短い千葉医専と日本医専を受験することになった。千葉医専には見事失敗したが、日本医専には幸いに合格した。その頃新聞の投書欄で東京医専が無試験開業の指定を受けた旨の記事があった。

当時私は神楽坂近くの横寺町にあった郷里の群馬県佐波郡立郷友会と言う寄宿舎にいたが東京医専も受験することにし、学校が東大久保と言う事で省線の東大久保駅に下車して尋ねたがなかなか判らない。尋ね尋ねてようやく西向天神奥の東京医専を探し当てた。日本医専もひどい学校だと思ったが、東京医専も当時いわゆる大久保原頭の文字通りの原っぱの中にあり、日本医専より更にそれに輪をかけた印象だった。指定第一回と言うので志願者も比較的多く五百名以上あったが、入学許可されたものは百五十名位だったと思う。合格発表の日であったか体格検査の日であったか、一同を講堂に集め偉そうな先生たちが東京医専の生い立ちについて熱弁を奮った。血の気の多かった私は感激して日本医専の入学を取り止め、東京医専に入学した。後でその熱弁家の一人こそ先

輩の熱血漢波津久統重先生その人であることを知った。当時の教務課長は天野中佐で授業第一日目、数学は天野中佐の出題らしく入学試験の数学問題についての解説があり、私は数学は満点の自信があったので得々と答えたのを覚えている。

当時の校長は順天堂院長佐藤達次郎先生でしばしば乗馬で登校された。医学校の校長で乗馬で登校されたのは他にはなかったと思う。先生は非常に謹厳、無口ではあったが、一面なかなかユーモラスな面もあった。スポーツを非常に愛され、ご自身学生時代はボート、柔道、水泳、乗馬をやっておられたようである。また大相撲がお好きで太刀山がひいきであった。毎場所のように眼科の須田先生と桝席に姿を見せておられた。

東医入学に当り優秀なスポーツ選手には特別に配慮して頂いた。また各種試合に優勝すると大変に喜ばれ、当時四谷三河屋すき焼店、その他の料理屋に選手を招待され激励された。私が二年生の時であったか、一年先輩の剣道の鈴木北民、田林綱太の両氏と相談し、先生のポケットマネーで柔、剣道の道場を建てて戴いた。多分当時で約四千円くらいだったと思う。また後年昭和八年頃相撲道場建設の議が起こり、私が相撲部後援会を作り、部関係者、その他の先輩から約六百円を集め、残りは先生のご寄附で出来上った

私は中学時代柔道、陸上競技、そのうち特に槍、砲丸、円盤などをやっていたが、当時東医にはまだ陸上競技部、柔道部などはなく、運動部は庭球部、相撲部、野球部、卓球部（当時ピンポン部と称していたと思う）くらいであった。私は同級の石川憲一、織部孝信らの諸君とはかり、当時近くにあった大久保青年道場や四谷警察署で稽古をしたものである。またその頃しばしば招待された柔道大会にも出場した。当時千葉医専に柔道大会があり、私は個人で第三位に入賞した事もあった。前述の通り二年生の時か柔剣道の道場が建設され、佐藤校長先生

の推薦で中山博道、また同氏の推薦で中野正三の両氏を師範に迎え、柔剣道部が確立された。当時の柔道部には一年上級に鍋島敷夫氏が同級には小暮の外石川憲一、堀真男、一年後輩に佐藤邦文、千葉馨、今藤久麿、富樫元次郎の諸君、後桝岡智、井上武雄の諸君が加わった。当時柔道部、相撲部の部員は大部分両部員を兼ねていた。私が相撲部に入ったのは同級石川憲一君の勧誘によるもので、当時相撲部には早川一郎、北郷恒一、斎藤健君（後の長島氏）、近藤輝雄、波田野清一、広瀬臻、一年上には宮尾益一郎らの諸氏がおられた。同級の石川、堀、小暮は三羽烏として卒業まで一年先輩の宮尾氏と苦楽を共にした。大正十年東医として初めて堺大浜の全国学生相撲大会に出場したが、当時学生横綱糸谷、田中を擁し全国に勇名をはせていた神戸高商に小暮、石川、宮尾が勝ち、一躍無名の東医が注目を浴びる事になった。当日私は幸いに五回戦とも全勝したが今でも忘れ得ない感激であった。ついで相撲部も追々発展し、桝岡、森山時代を経て遂に城、藤岡、橘の諸君を擁して念願の全国征覇を遂げるに至った。

庭球も盛んで同級依田安豊君は軟球界のナンバー一で、その球さばきは実に絶妙で、当時の活躍振りは文字通り無敵の観があった。また同級の国定君、先輩の久保、菅生、高安の諸氏も忘れることは出来ない。

野球部も医歯薬では活躍して居り、同級では坂崎善雄、渡辺美三雄の両君、先輩では鳴海康仲氏が印象に残っている。

剣道部も盛んで同級では高野新一郎君、先輩では前記鈴木北民（後高橋）、田林綱太、松田重雄、後輩では穴沢惣吉の諸氏が活躍して居られた。

卓球部では同級の山口重方、小倉良男の両君、一年先輩の吉永辛八郎氏が思い出される。当時の運動部で忘れ

ることの出来ないのは応援団が、太鼓、バシン持参での応援振りは物凄かった。初代は永井誠夫団長、次いで二代は同級岩波賛君で、いずれもその手振り身振りは見事だった。その後指田抜天君も団長として活躍した。

私が三年生当時の校友会の委員長は剣道部の鈴木北民氏で私は副委員長であったが、文化部と運動部で予算の件で多少対立があった。文化方面では同級の井上勝、片根勝雄、松井好夫、岸田俊夫の諸君が活躍していた。当時の校友会雑誌が「仁叢」となったが、井上勝君の発議だったと思う。

私の忘れる事の出来ない異色の同級生が二人いる。一人は同郷の故女屋敏信君で、他の一人は朝鮮の金太陽君であった。女屋君は家庭の事情で運送店のアルバイトをしながら東医を卒業したが、左翼的の思想の持主であったが私とは良く気が合った。金太陽君は被征服民族としての意識が強く、当時でも反抗的な意見の持主であった。一度会って見たいと思う。

10　大正から昭和初頭の学生時代の思い出

桝岡　智（昭和二年卒）

大正十年に攻玉社中学を出て日本医専を受けたが見事に失敗、二十一歳という徴兵適齢期は浪人することは許されない時代であった。本意ではなかったが明治大学の商学部に入学して徴兵猶予の特典を受け、ようやくにして大正十二年に東京医学専門学校に入れて貰ったので、待望の医者になれるかも知れないという希望が持たれ、今日の私の人生行路の第一歩となったことは何と言っても第一に忘れられない思い出である。

その頃の東医は今から思えばまことにお粗末で、広大な赤土の運動場には山ほどの建築材料が置かれ、波瀾に生まれた新興学舎の姿が窺われた程で、校舎はもちろん、病棟も長い廊下に繋がれたバラック建で、現在の本学や病院に比べるとそれこそ雲泥の差という言葉はこの事だと思える程のものであった。それでもその時の在学生の意気込みは極めて活発で、向学心に燃えていたことは今日をなす所以でもある。それも同窓出身の教授として、現理事長の佐々先生をはじめ、故人となられたが解剖の佐野先生、生化学の三坂先生をはじめとして、篤学者で熱情家の原先生が中心となって後輩のために血の通った教育を、そして創学当初の敢闘精神をたたき込まれ

るので、学生の向学心をそそり、赤土の運動場などは問題ではなかった。かくの如く教授と学生との子弟愛は他の大学のそれに比しては問題にならぬほど貴重なものが育てられ、これが東医精神となったものであると信じている。

私たちが入学当時の教授には故佐藤達次郎校長をはじめとして、今なおかくしゃくとして研究に精魂を傾けておられる世界的の病理学者の緒方知三郎先生、小児科の清水茂松名誉教授、内科では松村教授、榊原教授、岩男教授、眼科の須田卓爾先生は相撲部長をしていただいた関係もあるが、ご自慢の「カイゼル」髭で有名なばかりでなく、卒業試験に厳しいので恐い先生の定評があったが、私は大変可愛がられたし、温みのある名教授でもあった。古武士然たる先生の御姿は未だに忘れられない恩師である。さらに内科の岩男先生の診断学には種々の思い出もあり、柔道部としても大変御力添えを頂いた恩師であった。でもいずれも故人となられていることは淋しい。しかし、現理事長の佐々先生はその当時同窓出身の専任教授であったし、学生と共に遊び、共に学ぶという全く慈父のようなご指導を受けた。ことにお好きな庭球は、ほとんど毎日学生と共にラケットを手にされていた御姿は当時の運動部員に限らず全学生崇敬の的であった。五十年経った今日でも東京医大にはなくてはならない全学同窓生にとって一番親しみのある先生で、絶対的の信望のある所以である。故人となられた佐藤先生も、今なお本学の将来のために種々の御努力をされている。原維持会長も本学出身の教授として数多くの学生を教育され、母校愛の結晶ともいえる熱情家であることは昔も今も変りはない。三坂教授も本学出身で、我々の時代からまことに地味な先生であった。清水先生は他学の御出身ではあるが、創学当時からの小児科学の教授で、緒方知三郎先生と共に東医開設当初からの恩師で、東京医専当時からの「ホープ」であったし、後にはお二人共に本学

の学長として御在任中大学のために終始尽されたことはご存知の通りである。生理の天谷千松先生、産婦人科の下平尚先生、皮膚科の上林豊明先生、外科では佐藤清一郎先生が一番印象深い教授で、今はいずれも故人となられたことは悲しい事である。なお外科では陸軍軍医総監という偉い肩書きの先生芳賀栄治郎教授、附属博済病院長には海軍軍医総監であった西勇雄先生が着任されていた事は東京医専の教授陣容の異彩であった。私が海軍軍医を志願したことも西病院長の御指導である。当時の学生にも随分風変りの学生がいた。背広姿で往診鞄を提げ、正門まで人力車で来た学生がいたのには驚いた。さすがは自主独立を唱導する医学専門学校であるという感を深くして、末頼もしく思われたのは私ばかりではない。私たちの級にも北海道で市会議員をやったという者もいたし、現役の陸軍騎兵大尉を辞めて入学したという楠義信君、砲兵大尉を辞めて入学した江口君がいた。関東で馬術部が優勝したのもこの時代である。又私たちの三級下にその頃の催眠術の大家中村古峡先生という偉い人も入学してきた。ある先輩は赤羽でそば屋を開業して通学していた人がいた。かくの如く相当の年輩と共に社会的にも相当の地位についた人も一学生として東京医専にいたが、何事にも我々に同調して、あたかも童心に返って楽しい学生生活をし、校友会のもめた時でも良く団結して正しい運営に協力して貰ったことは校友会の世話役を務めていた私には忘れられない嬉しさである。

当時の校友会の現状は、以前に運動部が横暴を極めたという反感で、かなりの非難があったようである。その中でも運動部と弁論部の確執は相当なもので、時には暴力沙汰もあったとの事であったが、私の時代には弁論部と仲よく手を振って総て円満なる話し合いで校友会の運営がよく出来た事も忘れられない。相撲部の古い先輩は当時解剖学の助教授であった早川一郎先生がおられ、種々と面倒を見て頂いた。その外波田野清一先生、宮尾益一

郎先生、佐藤邦文先生、千葉馨先生、堀真男先生、石川憲一先生、小暮行雄先生がいたが、今は早川先生と小暮先生を除いては全部故人となっておられる。若いところでは西村英三君、野沢菊雄君、奥山農一君(戦死)、小出欣男君、星山六男君、帆足三郎先生らの猛者もいた。後には森山秋松君や城義雄君の如き強い選手もいた。西亦治信君（故）は病理の助手として忘れられない精力家のみでなく、東医卒業後は北海道で開業して大成功して、母校のために随分協力したし、人一倍愛校心、正義感の強い人で、急逝したことは大学のためにも惜しい人物であった。剣道部には現名誉教授田林先生、故人となられた高橋北民君が対照的の名選手で、その後には私の級で春日義君が最高段位で主将をつとめていた。吉元盛憲君も活躍していた。庭球部は依田安豊、武者素助という名コンビで、軟球で全日本選手権を獲得して天下に名を挙げたことは、東医の運動史に輝かしい功績である。そのあとをついで岩崎辻男（現参与）、川野、江原、内海栄君と相次いで庭球部の伝統を守っていた。野球部には古瀬清水、原田退治君がいたし、山岳部には故名誉教授の篠井金吾君が創設して基を創り、教授として在職中も自ら山を愛し、山によって人を創る信念で努力の結果比較的新しい部ではあったがかなりの部活動を実行していた。その一部として上高地に高山医学研究所を設けて高山医学に貢献した実績は大きい。そのほか世界的外科学の大家として東京医大の名を挙げたことは承知の通りで、正に東京医大のホープであった。今度由緒ある上高地に故篠井名誉教授の胸像が山岳部の手によって完成したことは、まことに当を得た顕彰で山岳部に敬意を表したい。柔道部もまた相撲部と共に中野正三師範の指導で長島正文先生、高橋六弥先生等の先輩が活躍していたが、私が主将になってからは西村英三、野沢菊雄、野津快造、小出欣男君の新進が入学して全盛時代を作り、関東医歯薬柔道大会に優勝したのもこの時代で、東医の運動史上に残すべきものである。次いで海村四郎、関口恒五郎君の如き名

選手を出している。

かくの如く、東医の運動部の活躍は全国各大学の運動部と互角にその技を競い全国的にも注目されるに至った。この時代が東医運動部の全盛時代であったと言っても過言ではない。運動部の活躍に伴っての応援団の発展は目覚しいもので、初代の永井誠夫君から柳井主税応援団長に続いて指田君の応援団長は他の大学を圧倒するが如く名応援団長振りは特筆しなくてはならない。

以上は私の知る大正十二年から昭和の初め頃の東京医専の校友会の実状であるが、私が主として校友会を運営するようになった事も弁論部の協力のあったためであるが、こんな事が因縁で当時弁論部の主将であった木村政長（現理事）先生とも肝胆相照らす仲となり、先生が卒業の時私に「桝岡君、今度は帝国議会で会うよ」といわれた言葉を私は未だに忘れないが、このお互いが母校の理事会で微力ながらも理事として母校のために努力していることは奇しき因縁である。

我が大学の運動史を御紹介するに当り、書き残しておかなければならない大切なことは、開学の恩人、故佐藤達次郎校長先生のことである。先生は不言実行の方で、余計なことは一切言わない方であった。必要なことは明解に即決された方であった。私は運動部の事でたびたびとお願いに御自宅に伺ったが、その中でも柔剣道場がなくて警察の道場で練習をしている実状を述べて道場の建設を御願いしたところ、先生は直ちに御自分の金を寄附するから建設なさいとの御話には感激した。さすがは学生時代にはボートの選手をされ、スポーツに対して深いご理解のあった事は運動部の発展の原動力となったことは忘れてはならない。それに運動部の何部でも優勝すると必ず御招待に預かった記憶は今でも忘れない。相撲道場の建設もその費用の半額は先生の御寄附で、柔剣道場に

掲げた「養之如春」の大額は私が戴いて、表装して道場に掲げたものである。先代佐藤進男爵の御揮毫のものである。

昭和二年に卒業してから四十一年目を迎えた今日、学生時代の思い出はつきないが、私個人としての忘れられない感激は、相撲、柔道部の主将としての選手生活や医歯薬専門学校大会に柔道で第一回に優勝したこと。それに第一回渡米学生の代表選手として全国より選抜した十三名の学生を引き連れてアメリカ合衆国に学生相撲を初めて紹介して海外に名を挙げた海外遠征を敢行したことは、私ばかりの誇りでなく、当時東医の名を海外に拡めたこと。母校の、さらに又大正十五年度関東学生相撲大会に第三位優勝したこと。ことにその際に於ける全校挙っての応援は私の一生忘れられない感激である。そのために私は今でも校歌「ヒポクラテス」を歌う時思わず目に熱いものが湧き、満足に校歌が歌えない事がしばしばある程の深い喜ばしい思い出である。

今にして思えば我々の時代の東京医専の教育はいわゆる血の通った教育で、その時の教授のお言葉は何れも「価千金」で、私たち今日までの人生訓として貴重なものであった事を想い、故人となられた恩師、先輩、同僚の安らかなる御冥福を祈り、御蔭で今日在るを感謝してますます母校のために微力を尽くし、我が大学の発展を念ずるものであります。

11　昭和三年大火災後の学生復興後援会

――万年大学昇格運動など――

林　義之（昭和四年卒）

昭和四十年春、母校の入学式に参列のため久し振りに上京した。そして校門をくぐり、校内の中心的建物である基礎医学教室の前に立って、新入生諸君が希望と喜びに胸をふくらませながら集合する姿を眺めたとき、三十数年前の私たちの若い日に、母校の焼け跡に二つの基礎医学教室の建築を自分たち学生の力で建設した当時の懐かしい忘れられぬ思いにふけった。

万年昇格運動

大正十四年私たちが入学した当時、既に学内には昇格運動が機会あるごとに盛んに叫ばれていた。しかし反響のない運動に半ば絶望した学生の中には「万年昇格運動」と批判する声もあった。

当時の校長佐藤達次郎先生は、医専でも大学でも要は学力の問題である。内容があれば医専でも結構だ、という考えであったが、当時の学校はあまりにも貧弱な設備で、内容の充実した学校とは学生たちには考えられなか

った。校長の考えと学校の現実との距離は余りにも大きかった。即ち学生の考えは現実的で大学昇格をするには設備と内容を充実しなければならない。即ち昇格運動は学校を立派にする唯一の最短距離の道であると考えていたのである。

私たちの一年上級にいた校友会委員長米波富作君は昇格運動の熱烈な指導者であった。米波君が最上級生の時、同君に連れられて昇格運動の役員が揃って佐藤校長宅を訪れ、そして応接室の廊下に座り込んでいたことがあったことを記憶している。立派な応接室と校長兼順天堂病院長の地位に恐れをなしたのか、どんな問答がなされたのか記憶に残っていないが、しかしこの学生の要請の後にも昇格問題について何の変化もなかったのだから、恐らく若い学生の私たちは校長にその血気を適当にたしなめられて帰ったのであったことと思う。

「奮闘の半年」

大正五年五月、四五〇名の学生が日本医専を同盟退学して東京医専を自らの力で創設した当時の記録を一冊の本にしたもので、この書籍によって血書の連判状や、又この運動のために自刃した先輩の父君のことなどを知った。この文書は後記する昭和三年の学校の大火災後の復興運動の大きな原動力となり、私たちの毛語録のようなものであった。

昭和三年の大火災と復興後援会

昭和三年三月十九日、第三学年の学年末試験を終って帰省した（郷里は岐阜県中津川）。その帰省の私を追

と校舎の一部分を残して他はほとんど焼失してしまっていた。無数の図書が校庭一面に運び出され、泥を浴びて惨憺たるものであった。そして前日急遽開かれた学生大会で結成された学生復興後援会の委員長に私が選出されていることを知った。これは級長の佐多正大君や、修養会の指導者であり、大人の学生であった内野正幸君らの推薦であったと思う。私はおとなしい学生で、自分では委員長の資格者とは全然思っていなかった。しかしその後一年間、委員の諸君に助けられて学校の復興に予期以上の立派な業績を残した後で、両君は私自身よりも私を見抜いておられたということを深く感じたものであった。復興後援会の基本的方針は、今度の復興は即ち昇格につながるものと考えた。

学生復興後援会を結成した時集った委員諸君の優秀さと熱意は私の生涯を通じて忘れられない立派なものであった。四年生の委員で印象の深かったのは佐多、内野両君をはじめ、石岡、峯村、五石、中瀬の諸兄であった。峯村君は建築担当で、全国帝国大学医学部、或は医科大学の基礎医学の建築を詳細に調査してその資料を集め、大林組の大森技師を設計技師として決定した。同技師は当時明治大学の新校舎を設計し、学校建築設計の第一人者と言われていた人であった。大森技師は多忙の中を東医の学生の美挙とその熱意に動かされて喜んで実費以下でその設計に当られた。同技師が、学校ならびにその周辺の一〇〇年後の姿を想像して設計するといって、当時慶応大学医科の特別室（当時一日一〇〇円）に一カ月入院させて貰って、外部からの雑音を一切遮断した生活をして、構想を練られたという感激する話もあった。

日本一の基礎医学建築

この基礎医学校舎の設計は、現存の地下一階地上三階の建坪一三〇〇坪、基礎医学の校舎（建物）をジンメトリイシュに二つ建てることにし、第一期工事として病理、解剖、細菌等の各教室を容れる建築にとりかかることにし、第二期基礎医学建築として対称的に同じ大きさの建物を建てて、生理、薬理、医化学等の各教室を容れる予定とした。これが完成すれば当時としては全国一の良く纏まった優れた基礎医学の建物ができると、私たちは自信と喜びを持った。この第一期工事の完成式は昭和四年十月頃で、私たち昭和四年卒はこの建物（教室）で授業を受けることなく卒業した。

寄金募集について

石岡君は総務を担当し、特に寄附金の募集に全力を注がれた。在校生父兄からは生徒一人に二五〇円宛の寄附を集め、卒業生からの寄附金を集めるためには夏期の休暇を利用して全国各府県の地図にそれぞれの市町村所在地のところに卒業生の数の赤丸を付し、卒業生名簿と共にその地図も一緒にその県の学生に渡して全卒業生を廻って寄附金の募集に当って貰った。

復興後援会の委員の活動を推進するのに、父兄の寄附金を使用してはならないと考えて会の運営費用を作るために映画、舞踊と講演の夕を青山会館で開催したこともあった。学生復興後援会は寄附金総額約二十五万円を集めることができた。現在の金額にしておおよそ二億五千万円程度に当ると思う。

た、そして私たちは学校当局に支払能力が無い時は自分たちで集めた金でこれを払う覚悟であったが、私たちはできることなればこの二十五万円を第二期の基礎医学建築に振り当てる考えでいた。この間他の委員諸君は当時の理事者の財力調査を行なって、第一期工事の費用を支弁する力のあることを知っていた。

卒業について

昭和四年卒の私たちの学年は、盛んに進捗する第一期工事を毎日校庭に眺めながら講義を受け、卒業式もバラック校舎で挙行されて卒業した。その時三年生の浅野君が副委員長の位置についたので浅野君たちの次期最上級諸君に、「第一期工事に引続き、基礎医学第二期建築工事を続行してもらいたい。その時にはこの寄附金二十五万円を使用してもよい」という指示をしてこの金を渡して、卒業した。私たちは当然第二期基礎医学教室の建築が引き続いて行なわれ、現在の建物がジンメトリイシュに二つできあがることを考えていた。

第二期工事の金で淀橋に病院進出

卒業した年に病院の淀橋進出が決定して先輩の諸先生に説得されて、浅野君たちは二十五万円をこれに使用して、現在の淀橋病院の第一歩を築いたのである。従って基礎医学教室は第一期工事だけに終って、この建物に全部の基礎医学教室が押し込むことになって、私たちが心配していた通りの状態になった。私たちの理想案日本一の基礎医学建物は実現しないままになった。しかし浅野君たちの処置は病院発展の礎石になって、良策であった

と思う。これが病院の淀橋へ進出の基礎となったのである。

すくすくと伸びた竹にも幾つかの節がある

今日の母校、東京医大は立派な誇り高い私立医科大学に成長した。しかし母校の昔を知る者には不思議な経過と発展をしてきたものだとつくづく思う。その五十年の間には幾つかの危機や分岐点があった。即ち節があった。私たちも母校のために情熱を捧げて、その危機の一つを乗り越えたのだ。私たちが常に母校を愛し続けてきたのも、その一つの節に直面してこれを立派に乗り越えた誇りと喜びのために一段と強くなったためと思う。

母校は今後も幾多の節を残しながらますます発展してゆくものと思う。

12　東医学術研究会の想い出

池見　猛（昭和七年卒）

私が入学したのは昭和三年であった。東医は陸士、一高と匹敵する俊才の入学する学校と聞いておったのに、入学してみると実務訓練のみで、飛躍すべき基礎教育が貧弱で、これでは大学昇格も至難であり、学位論文を作成する事も困難と考えたので、学生、学校当局と交渉、決然起って高等数学研究会を昭和五年に結成、和合卯太郎先生を会長として全学生に呼びかけたところ、二七二名の参加者を獲得したのである。（講師には東大助教授医博杉田直樹先生が心理学を、和合先生が高等数学。時間割は「数学」火曜日八時―十時、「心理学」七時三十分―八時三十分、「数学」土曜日十七時―十八時、聴講料五円）

本講座に原三郎先生が聴講生として参加頂いた事は、本会の発展に大きな原動力となった。昭和六年には参加者が全校学生の三分の二という多きに達し、佐藤達次郎校長、清水茂松教頭の偉大な識見によって、学校の時間割が「九時―十六時」までとなり、「八時―九時」、「十六時―十七時」迄の時間はすべて学術研究会の時間となったのである。第二年度の講義科目は、心理学杉田先生、誤差論和合先生、ラテン語呉法大教授、ギリシャ語緒

方東大教授、フランス語判事柴田兼彦先生、法律概論東大法学部長穂積重遠先生、経済概論東大経済学部長森荘三郎先生、栄養学東大農学部長鈴木梅太郎先生という超一流の講師陣であった。東医五十年の学生運動を回顧すると、日本医専からの総退学は「対話なき学生運動」であり、これが結実して東医が誕生、吾々の運動は学校当局との話合による「対話による学生運動」で、これが東医学術研究会として結実したのである。

本会は東医学生運動五十年の流れのなかにおいて、香り高き一駒として後輩への貴い遺産である。吾々の団体は、大多数の会員を擁して課外講座を活発にやったのは、当時としては全国では唯一の団体である。

最後に提案いたしたいのは佐藤、清水両大恩人の胸像を建立して後世に残すべきではあるまいか、建学と勉強の大精神で全学結束の姿で学生運動が有意義で大地に定着し、内部的には金銭上に若干の誤りもなく、当時としては何千円という莫大な金銭が次々と次の時代の者に引継がれたこの輝しい東医学生運動の真髄を後輩諸君が育成されん事を、また本運動に竹内松次郎、荒井恒雄両先生には十円宛の御寄附を下さった事等を思い合せ、東医全学の皆様に感謝を捧げ、物故なされた諸先生、諸先輩各位の御冥福を祈念して擱筆する。

13　昭和三年大火後、昭和四年新入時代

指田吾一（昭和八年卒）

昭和三年の大火の後仕末の末だ終えない頃、私たちの母校東京医専は復興の意気に燃えていた。

昭和四年はちょうどその頃であった。浅野泰校友会委員長は常に「復興する迄は頑張らねば」とわれわれ後輩を激励した。

私達最初の級委員は樫村実を筆頭に、各文化、スポーツ十名余、二学期からは全員選挙、桑原寛、塚田清、花輪音三、佐藤誠、佐藤清明、山中秀夫、三戸部亀夫ら私も末席に加わった。当時スポーツでは、医歯薬において、また大学において、優秀組であった。剣道の斎藤、清水、遠藤、伊藤(馨)、鈴木、春日、私も一枚加わった。柔道では佐藤、関口。野球では井口、田淵。相撲部は西亦、服部、城、藤田、相良。山岳部は大竹、今井。卓球部は江尻、小俣、その他庭球部等々多士済々であった。私も各部に所属し、いざという時補欠に出たもんだ。また応援では他校に負けなかった。相撲で神宮相撲場、両国国技館（今の日大講堂）で、拓大、早大、慶応と覇を争った。城、藤岡、橘、服部、相良のメンバーで全国大学で優勝した。城、藤岡、橘は続いて学生横綱位を獲

得して、東医の名声をいやが上にも高揚した。剣道も医歯リーグでは常勝軍であった。

一年の時の竹内独語には皆困難した。佐野解剖のオスフロンターレの発音が今も耳に残る。三坂、原、天谷、和合と基礎医学は、建ったばかりの本館のコンクリートの廊下に響いて流れる。井上解剖の円の丸さに感歎した。

この頃日本は満州事変直前で、軍事教練が激化した。いよいよ毎週一回が二回となって、戸山ケ原の練兵場へ巻脚絆、いかなる理由を添えても欠席は減点だ。病人だけは理由によって見学を赦される。几帳面の八木沢中佐は時間から時間まで一分の隙間なし。これでは緊張だけで緩和がない。実力発揮できるもんではない。案の定、秋の査閲には都下最低との酷評だ。八木沢教官、不動の姿勢で恐縮。いよいよ激しい軍教が始った。こんな事で連続できるものではない。でも八木沢教官は吾々の前から日ならずして消えて行った。その後鼻の頭が凸凹で着任と同時にガンモドキと仇名を奉った小山中佐、最初の挨拶でアメリカ西部の鉄道でギャング退治の自慢話、この頃の軍人にしてはユーモアのある兵隊と思っていたら呼出しが来た。「おい指田、貴様応援団長と級長しちょるそうだな。一つ聞くが、学校の名誉挽回に考えがあるか、どうだ」来たなと思った。ここだと思って直言だ。「ありますよ、人間は緊張ばかりじゃ小便が出ちゃう、休めをうんと入れなくては」「たとえば、戸山ケ原の査閲でも騎兵隊兵舎の裏の窪地をうまく使う事です。集合したら、きっとよく全員をあの窪地に導入します、そしてゆっくり休ませて、査閲開始と同時に行進ラッパで査閲官の前へ一組だけ前進させる。もちろん充分査閲を受ける。終ったら次の一組をラッパ吹奏に合わせて前進させる。終った組はそのラッパで再び窪地へ、かくして整然と査閲を完了する。全員終了後ラッパで査閲官の前に現れる。どうです、これで都下随一ですよ。」この事はいろいろ研究の結果実施された。査閲官講評に曰く「都下の大学専門学校中最優秀と認める。昨年の成績と思い比

べて長足の進歩を多とする。」佐藤校長は白馬の上で滅多に笑った事がない人が、かすかに喜んでいた。がんもどき教官も鼻をもぐもぐにたり、やがて小山教官、大佐になって栄転した。

その頃、いよいよ世間もうるさくなった。満州に北支に上海に、井の中の蛙があばれ出した。私もいろいろとやらねばならぬ事がふえてきた。軍国時代に突入だ。応援団では池田太郎、清水正貴が海軍、永山武久が陸軍の依託学生となった。その後、清水は中佐になって独逸から帰途シンガポール沖で戦死と聞いたが、彼今いずこ。

当時学校周辺に旭組という暴力団が闊歩して、恐喝された学生、おどされた出入の商社、商店、数多い学校周辺の食堂などは特にささやかな利益で、善良な学生を大変便利がらせていたのである。そんな善良な商店や食堂をいじめるのを放ってはおけない。不良退治をやらねばならぬ。これも忙しいし又その仕返しを始末しなければならなかった。これも忙しい事の一つであった。

竹内細菌学はまるで帝王様、これには参った。いたずら学生が下駄の足音させて退出したが、烈火の如き激怒、「こんな不真面目な学生の居るクラスでは授業はできぬ。不愉快だ」と講義途中で帰ってしまう。追っかけて詫びるやらどなられるやら、やっと次から不逞者を出さぬでけり、また須田眼科は学生服を着ている奴は患者の前の実習は駄目、これを幸いに皆背広を作り得意であった。五尺そこそこの須田眼先生、油断すると飛び上って怒ったもんだ。先生は時折おこった人が憶えられる。内科は診断と血液の岩男督さん、特に神経学の藤井先生、外科は消毒と迅速であとは新聞慢談の佐藤清一郎先生、各々特徴があった。篠井金吾先輩は教室外のわれわれも、教室員並に指導してもらったもんだ。私も医師三十五年間、数千人の開腹の経験の中で誰よりも我流ではあるが、私のメトーデには産婦人科の手術の時も、篠金のイメージがある。八年間召集された軍医の思い出は迫撃砲

や爆弾の硝煙の中、戸板の仮設手術台上の数千回の手術や治療も篠金の姿を思い出したものだ。これらすべて東医の、母校のお蔭である。

昭和七年、大学相撲の大会で優勝確定の瞬間である。両国国技館の受付へ応援団会計陸軍依託学生永山武久が二百名の応援団入場料二十円也を支払った帰り道「この野郎東医の応援団だ」と拓大応援団に袋だたきに会った、と言って眼鏡割られて帰って来た。かっと来た。大喝一声「東医応援団、気を付け、わしが帰る迄動いてはいかん、指揮は吉井（日野）虎彦副団長とれ」。私は桜のステッキを持って拓大応援団、五百名の中へ突入した。「応援団長を出せ。今うちの応援団員なぐった奴に詫びさせろ」、言い終らぬ中に縦横からなぐりかかって来た。幸い鉄柱が一杯ある。なぐり返しては鉄柱を背負い、飛んではなぐり、なぐっては飛び又鉄柱へ、この時位人をなぐった事は前にも後にもないのである。相手は五百名、こちらは一人、かえってこちらは安全であった。騒ぎがあまり大きくなった。警察官、憲兵、小山中佐迄出動でやっと静まった。拓大応援団責任者が詫びておさまった。後日譚、東医には生命知らずがいるもんだと、第三者から私は聞いた。

思い出の中で、正月の暴力団退治とこの事を、血気とはこの事だと思われる。当時、硬派、軟派、思想派、ちゃっかり派、いろいろあったが、あまり書くと悪口になる。この辺で筆を変えよう。

昭和七年秋には風雲急を告げた。戦争ではない。国家試験だ。「私立医科大生には国家試験をする」と。朝日新聞に「文部省曰く、いんちき医専を征伐するんだ」と。朝日新聞社に行って詰問したところ、文部省で言っているから書いたのだと歯が立たぬ。そこで文部省へ。玄関上った途端に「下駄をぬげ」と。「何を日本の文部省が日本のはき物をぬがして外国人の土足はゆるすのか、日本の文部省か外国の文部省か」。私は断じて下駄をぬがなか

た。赤間専門学務局長は日ならずして転任だった。

「いんちき医専と言われて起て」等々の演題の弁論大会等で文部省に文句をつけたけれども、第一回国家試験を受ける事になった。

一、アミトロフィシエラテラルスクレローゼ

一、白血病

等藤井、岩男両教授得意の山がストライクであった。私たちの仲間も及落心配の人まで悠々八十点平均で、これまた都下で優秀組に入った。逆効果の有難い思い出でもある。藤井、岩男の両先生ニヤリ、佐藤校長も御気嫌良かったそうだ。

東医の思い出はいつも秋空のように続く。

14　忘れ得ぬことども

——昭和六〜十年ごろ——

佐藤三蔵（昭和十年卒）

在学時代を振り返ってみると、いろいろな思い出がまるで走馬燈のように去来して、何から書いてよいのか迷ってしまう。今日のわたしを作り上げ、育て上げて頂いた母校の恩恵は、年経るに従ってますます強く感じられ、同時に過ぎ去った学窓の日々の思い出が、まるで昨日のことのように鮮烈な映像となって蘇ってくるのである。

鳥取県の海岸の町に生まれたわたしは、少年の頃から世界に雄飛する日を夢みていた。そのためには語学を学ぶべきであると判断して大阪外語に学び、卒業と同時に浜松二中の英語教師として赴任した。ちょうど昭和二年のモラトリアムの年であり、世界恐慌の波が押し寄せてきた時であった。不況の作り出すさまざまな悲劇が、年若い教師の夢を踏みにじった。貧苦のために学業を中断せざを得ない生徒たちや、病苦にさいなまされる人々を見ているうちに、猛然たる正義感が湧き上り、医療報国の志を固めるようになった。

昭和六年、兵役を終えたわたしは東京医専の門を叩いた。すでに歩兵少尉に任官していた経歴もあって、入学以来ずっとクラスの級長を仰せつかり、卒業の年には校友会委員長にえらばれた。仕事は大変だったが、そのお

蔭で大学昇格運動にも微力を尽すことができたし、母校の飛躍的な発展の時代を自分の眼で見ることができたことは幸いだったといえる。入学した年の五月には附属淀橋診療所が開設され、同じ年の十月には博済病院を合併して淀橋病院となり、大学昇格の基盤は着々と整えられていった。

わたしたちはしばしば佐藤達次郎校長を四谷の私邸にお訪ねし、先輩たちから受け継いだ昇格の熱望を、若さにまかせて懇請した。その頃の先生のお顔を今でも時々夢にみることがある。先生は信念の人であった。わたしたちが必死になって喰い下っても、言われるお言葉はいつも同じだった。「君たちは医専が良くてうちへ来たのだろう、実力さえあれば大学の必要はないのだ。日本一の医専にするためには君たちが懸命に勉強しさえすればよい」と全然取り上げる気配さえもお見せにならなかった。この点、最近の大学経営者や教授連が何かというと学生の顔色をうかがうのとは雲泥の相違で、先生は厳しくわたしたち学生を戒められながらも、心中では秘かに昇格を着々と研究されておられたのである。

わたしは在学中剣道部に所属し、関東医歯薬剣道大会では四年連続優勝を飾ることができた。また全国高専大会でも真紅の大優勝旗を母校に持ち帰ったが、その都度校長先生は丸の内の陶々亭などにわたしたちを呼んで下さった。豪華な祝宴の雰囲気のなかで、ひとりで先生の慈愛に満ちた杯を受けた時の感激は、いまでも忘れることが出来ない。感激といえば軍事教練の査閲の日の思い出もある。学生ではあったが歩兵少尉でもあったわたしは実兵指揮にはいささか自信があったが、戸山ケ原で全校生徒を指揮したとき、査閲官から「管下随一」との講評を受けた。そのとき白馬にまたがって陣頭に立たれた佐藤校長が馬上からほほえみかけて下さった満足そうなお顔に、思わず涙ぐんだ時のことが懐しく思い出されるのである。

昇格運動のなかで、たった一つの悲しい思い出は、高橋琢也理事長の逝去のことである。授業料を上げても是非昇格をと懇願するわたしたちに「御父兄の負担を重くすることはできない」と頑としてお聞き入れにならなかった先生は、昭和十年一月二十日逗子の別邸で急逝されたのである。この日はちょうど日食の日であった。わたしたちは天を仰いで泣いた。宿願の昇格の日をまたずに昇天された学祖のために厳粛にして盛大な校葬が営まれ、わたしは生徒代表として弔辞を捧げたが、古武士の風格と、慈父の温顔が眼前に去来して涙がとめどもなく流れ、あやうく絶句するところであった。

わが母校の歩んだ道は、まことに茨の道であった。多くの恩師や先輩たちの血と涙の五十年であった。その故にこそ光輝ある母校の伝統を誇り高いものにしているのであり、その歴史の一環を担うことのできた光栄の思い出は、常にわたしの心の中に生き続けているのである。

15　学生時代の思い出

松本順弘（昭和十二年卒）

私が当時の東京医専に入学したのは昭和八年の四月である。それからどうやら落第もせずに四年間を過ごしたので昭和十二年の三月に卒業した。

入学をしてみて驚いたことはいろいろあった。校風はバンカラで、相撲の強いのに目を見張った。まず関東大学高専の選手権大会で団体及び個人優勝（橘氏）を勝ちとり、全国大会でも個人優勝（城氏）に輝き東医相撲部としては黄金時代であった。また学生で創りあげた学校であると愛校心を吹き込まれたが、当時の学校と病院はボロで貧弱であった。ことに当時の附属淀橋診療所の外来は古い木造の屋敷を改造して使っていたので、そのボロさ加減は相当なもので、患者を紹介する気になれなかったのも当時の実感である。

私たちの学年では九州の明治専門で電気を専攻されて来られた藤本慶治さんが最年長で、尊敬できる立派な人なので、学年の校友会委員に選び、加藤正明君が級長であった。加藤君は現在母校精神神経科の客員教授であり、国立精神衛生研究所の心理部長として活躍している。

授業がはじまると、ドイツ語もラテン語もわからないうちに解剖の佐野教授から Os frontale や M. deltoideas などの名称をつめ込まれたのには面くらった。さらに和合教授の電気生理学に至ってはチンプンカンプンであった。ドイツ語はB組で道部先生に教ったが、先生のカード式文法は非常に覚え易かった。二年になると岩男教授の内科診断学の講義が始ったが先生の講義と診断学の本は誠に難解であった。卒業後岩男内科に入ってから先生の本を読み、講義を聴くとよくわかったが、当時の学生にとっては難物であった。内科の講義も先生の研究と経験をおりまぜた格調の高いものであったため、試験の時には本当に苦しんだ、その点藤井教授の内科の講義はわかり易く学生にも人気があり、私たちのクラスでもかなりファンがあった。しかし教室員の研究指導までには手が及ばず、岩男内科に対応するような教室の業績のなかったのは残念である。

満州事変後の世相は軍隊化の思想が強かったため、軍事教練は盛んであった。しかし一年に入った時の小山教官も、その後卒業まで居られた谷津教官も教練には厳しくても恩情のある軍人であった。一年の時には九十九里の一の宮海岸に出来た廠舎に野外教練に行き、砂が靴の中に入って困った。三年生の時だと思うが、富士の駒形廠舎で夜エスケープをして飲みに行ったものが見つかり、帰りには武装したまま御殿場まで駈足をさせられ顎を出してしまった。四年生の時には七月に入って新潟県の関山演習場に三泊四日で出かけ、最後の日に妙高登山をやって現地解散して夏休みに入ることになった。ところが毎日雨が降ってずぶぬれになりながらの演習で、妙高登山も悪天候にさえぎられて不能となり、一日早く解散になった。私はB組の四、五名のグループで燕温泉へ行って泊った。同じ旅館でA組のH君、M君など数名の者と一緒になった。彼らは酒豪ぞろいである。私も彼らとクラス野球のグループなので少しの間一緒に飲んだが、到底太刀打ち出来ないので寝てしまった。その内に「H

君がいない」「I君も見えない」という騒ぎまでおきて捜し歩くとH君が共同風呂でいい気持になっているのが見つかったので安心して寝た。翌朝帰ろうとすると旅館の主人が「昨夜から石井さんが帰って来ていません。お友達はまだ寝ているので石井さんを一緒に捜して下さい」。帰りかけた私たちも荷物を置いて主人について捜しに出た。旅館の庭先は深い谷になっていてその崖上の草が押しつぶされていた。ここからもしや落ちたのではないかと言うことになって谷底まで急な崖道をたどって降りると、大きな石井君が血まみれになっている。もちろん意識はない。上まで六十メートル以上はある。ちょうど共同風呂の移転工事をしていたトビの親方がワイヤーに戸板をつけておろして、これに石井君を乗せて谷から引き上げることが出来た。車で山を降りて関山の町に一軒しかない医院に石井君をかつぎ込んだ。脳底骨折と脳挫傷で意識は遂に回復せず、私たちは交代で輸血などして頑張ったが三日目に息を引きとった。彼は静岡県出身で兵役もすませた年長者で、私たちの学年の中隊長をしていて人望があった。野天での火葬のときはフィアンセも来られ、私たちと共々に泣いた。もう三十年以上もたった今でもあの時の情景は私の脳裡に深く焼きついている。

私たちの学生時代も大学昇格運動は盛んであったが、附属病院も小さいし、なかなか実現しない、やっと附属病院の外来を新築することになったのが昭和十年頃、建築の始まったのは昭和十一年である。私たちはもっと大きな高層建築を望んだが、堅いので有名な高橋律人常務理事は現在の外来の隣りに研究室になっている建物の建築を始め、昭和十二年三月に完成した。その年に卒業して新入医局員となった私たちは初めてこの新しい外来の建物の希望に充ちて入ったわけである。これは後の余談であるが、あの建物よりも大きな計画があったのだが、佐藤校長が順天堂より大きくなるのを望まなかったのか、校長によって計画を縮少させられたのだと常務理事が

図面をみせて話されたのを覚えている。

私たちの学年で忘れてならないのは卒業試験の時、医専だけ初めて国家試験を課せられた、これは後に廃止されたが、私たちの時は内科一科目だけで、確か「心臓弁膜症について」という問題が出た。幸いに全員合格したが、大学との差別待遇に憤激したものである。

新宿の変り方は激しい。東京に住んでいる者でもちょっと行かないと戸惑う程の発展と変り方である。母校の病院も地の利を得て私たち学生の時のボロ病院が終戦後目を見張る程大きくなった。しかし日一日と成長と発展を積み重ねる新宿の街に追いついて行けない感じがしてならない。私たちの後に既に三十五回もの卒業生が出た。これからは若い人たちと固く手を握って母校の発展に全力を尽くすのが我々の責務と使命ではあるまいか。

16　戦争へ歯車が動き始めた

——その頃の東医文化の充実——

伊能秀記（昭和十四年卒）

昭和十年から十四年にかけての日本はその総力を次第に戦時体制に切り変えてその後十年に及ぶ果しなく続いた戦争への道を辿り始めた時期である。多くの苦悩と悲哀を押しのけて宿命的な歯車が動きだしたその時期である。昭和十年四月陽光燦たる東大久保の校庭に集合した新入生は三十人に一人という難関を突破した人々であったが、中には元海軍少佐の丸山君のごとく父兄かと見紛う高年の人も混っていた。昭和十年一月二十日創立の父高橋琢也先生の一周忌追悼式が行なわれ「高橋琢也先生追悼号」が編集発刊されたが、遂にわれわれは高橋翁の温容に接し得ぬ卒業生の第一回生となったわけである。この年二月二十六日、試験中の私は朝早く街に出て雪積む銀行前に武装兵士の立つ姿に驚いたがそれが全日本を恐怖のルツボに投げこんだ二・二六事件の勃発であった。欧州では三月ヒットラーがラインランド進駐を強行した。十一月日独防共協定が成立し十二月に入って張学良が蔣介石を監禁した西安事件が突発しこれを段階に中国は抗日戦に踏切った。世相ようやく騒然としてきたが学園はまだ平安であった。十二月に全校友待望の淀橋病院診療本館が完成した。輝く白亜の殿堂は中央線の車中よりも

眺められわれわれの胸を期待と誇りにふくらませてくれた。夏休みに入る前の数日間野外教練で富士裾野、千葉一宮、南軽井沢などの兵舎で宿泊した。汗と革の臭い、重い銃と行軍、夜中こっそり抜け出して田舎町に一盃やりにいった想い出を戦前の卒業生はみな持っているであろう。新宿の裏街はなお紅灯きらめき嬌声高く、藤井尚久先生をして「百鬼夜行」と歎かしめた程であった。「愛染かつら」「討匪行」、「露営の歌」など一抹の哀感をたたえて歌われていた。

昭和十二年七月北京郊外蘆溝橋一発の銃声は支那事変の口火となり十二月十七日には南京も陥入れた。社会全般が軍国調となり毎月一日を興亜奉公日として飲食店は自粛休業し、ガソリン統制で木炭自動車が走るようになった。校友会大会は学生々活には最大の行事で、多数の見物人が特に娘さんが多いので皆はり切って展示の説明やら余興をやったものである。われわれも青木、林、宮崎、永田、桃井、私らで「息子」、「商船テナシチー」などを上演した。私が演出して満場の観衆が盛大な拍手をしてくれたのだから誠に有難き時代と言わねばならない。

昭和十三年に入るや急激に戦争の波が押し寄せてきた。徐州陥落まで広漠幾百里、青々とのびた麦畑の大平原を黙々と行軍はつづき、七月北満では対ソ前哨戦のごとく張鼓峯事件が起り、十月には広東、武漢三鎮の占領が完了し軍国主義の風潮が強まってきた。この頃より先輩、同僚の間からぽつりぽつりと応召者が出てきた。坊主頭の制服に白い日の丸の襷をかけ、歌い励ます人垣の中央に佇立する人の姿が今でも目に浮んでくる。その心中を察する時、胸中が熱くなる。一年上の桜木四郎さん、また一年下の舟橋四郎さんや同級からは西川梅治、高橋芳雄、山本佐文、鈴木竜夫、岡本千恵喜、桃野泰三の諸君が出征した。この年朽ちかけていた臨床講堂が漏電に

て焼失したため十月には新築され、私たちがここで講義を受ける最初の学年となった。

昭和十四年は欧州において第二次世界大戦が勃発した年である。三月一七〇名の同級は無事卒業したが、卒業後半年足らずで八〇名の人が委託生、短期現役、軍医予備員の形で陸軍の軍医として、また海軍々医として出征し、その後も相次いで出征し、軍務に服さぬものは指を屈する程度であった。犠牲者も多く同級からは遠藤千蔵、藤田八左衛門、今泉久男、岩島啓昌、岩谷栄造君ら十五名に及ぶ人が護国の英霊として故国に帰ってきた。戦後二十四年を経て毎年幹事交代で東司会（昭十四卒の会）をやることにしたが、身辺忽忙に追われたためか未だに卒後始めて顔を逢わす懐しい人が現われてくるのも、この日本の最大の変動期に人生の青、壮年期を迎えたわれわれ年代層の宿命であろうと思っている。

さてこの辺で東医の文化面について一言書いてみたいと思う、大正五年九月十一日東京医学講習所が創立され、十月七日学生会発会式が行なわれた。先輩たちの自主自学、独立不易の熱血の情熱は詩に歌に、雄渾な文章に、また雄弁の形で奔流のように発表されている。ここに東医文化の伝統の基礎があると私は思っている。校友会編集部よりタブロイド版の「東医学園時報」第一号が発刊されたのは昭和十年六月十日であった。昭和十二年三月号の森口義春氏（当時編集部主任、四年）の学園時報回顧によれば発行までには校友会委員会の席上多少の迂余曲折があったようだが、当時の委員長の唐木秀夫氏や佐々木重臣氏らの熱意が委員会を動かし「東医学園時報」発行を可決したようだ。編集部は実務や予算の点で非常な不安を持っていたようだが部長原三郎先生の学生の意志を尊重した温い励しと新聞は正しく報道するものであり、個人の主義主観を入れないようにとの編集方針を指示された。昭和十二年二月後援会小委員会において時報を校友会、後援会両者の運営とし、紙面を拡充して

学内および卒業生の連繋を計り病院増新築を第一歩とする東医発展の資とすることとなった。六月に日刊紙大の発展第一号が発刊され、編集部が引続き編集を担当することとなった。主任には小林英一郎（四年）、副主任伊能（三年）、委員巽三郎（四年）、野中辰雄（三年）、三宅寅三、丸茂重貞（二年）、青島宗三郎、河本茂（一年）の諸君であった。一面は社説、学内外の報告連絡事項など、二面は同窓会関係記事、三面は学生欄、四面は文芸その他とした。この形式は昭和十七年五月二十日編集が学生の手を離れるまで続けられ、七年の永い間校友同窓に親しまれてきた。河合栄治郎、橋田邦彦、杉山平助、式場隆三郎、津田左右吉博士ら知名人の講演内容を掲載した。また谷津大佐の「陣中だより」、佐藤清一郎教授の「鮮満支旅行より帰りて」、稲葉宗夫君の「点と線」（勤労報国隊―北支班）、栗原操講師の「勤労報国隊満州班参加の感想」、斎藤福治氏の「北満牡丹江便り」、西郷美信氏の「中支野戦病院便り」、上原浪次助教官の「錦州附近」などの戦地ルポや戦地便りを掲載した。「窪田空穂還暦記念歌集『郷愁』を読みて」（原三郎先生）、「草創期の我が軍陣医学」（藤井尚久先生）は読みごたえのある文であった。時折「忍冬」句会が発表され心和む一刻を与えてくれた。

昭和十四、十五年にわたって行なわれた学生の生活調査はいま見ても立派なもので当時の学生の生活態度を知る上の貴重な資料と思われ、あの時代によく継続してやり抜いたものと、その努力を高く評価したい、その後稲葉宗夫、水野寿夫、里見裕、鈴木豊、金沢正寿、田口孟、田代通らの諸君が委員に加わった。

学生の文芸を中心にした「校友会雑誌」は年一回発行され毎号一五〇頁を超える堂々たるものであった。昭和十二年「医師としての社会及び人生に対する態度」なる題下にて懸賞論文を募集し、選者に東京女子大教授石村貞吉博士を煩わした。思索する医学生の心に真正面から喰込んだ。当選入賞の館野軍二、毛利直文、天願健三君

の三篇を掲載した。昭和十三年には教頭西勇雄先生に題字のご揮ごうを願い、佐野幹先生の品格ある山水画をもって表紙とした。「結核予防施設と医師の立場」(五十嵐五三郎)、「学生と自由」(三浦博)の論説をのせて学生の真剣な社会批判を取上げた。研究欄では「ノイエ・ザッハリッヒカイト文学史的一断面」(伊能)をのせてこの思潮の文学史上の位置づけを解説し、あわせてこの時代の報道文学理解の一助とした。創作、詩歌にも傑れたものが発表された。詩歌同好会(原三郎先生主宰)は毎回時報、校友会誌に作品を発表し、時局に対する青年の気持を反映した。昭和十五年頃より紙の統制も次第に厳しくなり物資の欠乏がはっきりしだし、やがて戦地も銃後も同じく苛烈な戦況となり、物心両面に重苦しい圧力が次第に強く加わってきた。

17　支那事変、大東亜戦争勃発当時の思い出

森　玄俊（昭和十六年卒）

今からおおよそ三十年前後の茫々たる懐古はさだかではない。私が入学したのは昭和十二年の春である。時あたかも西安事件により北支の空の風雲ようやく急を告げ、物情騒然たる時であった。こうして遂に同年七月七日、北京に近い蘆溝橋で銃声とともに端を発した日支事変は近衛首相の不拡大声明にもかかわらず、上海にとび、日本軍はさらに杭州湾に上陸し、南京総攻撃の幕は切って落された。こうした重大時局下にあって、学生は学生なりの生活を送っていたのだから、今にして思えば不思議な気がする。

新宿の繁華街は宵闇迫る頃は「別れのブルース」、「雨のブルース」の曲が流れ、酔客は巷にあふれ、東医の学生がその上に君臨し、中には午前様になるまで痛飲し、「ヒポクラテス」が呂律のまわらない斉唱の中をうろうろする夜もあった。しかし一方学徒としては立派であり、真摯であった。教授陣が充実していたことが幸せしたからだ。基礎も臨床もほとんど全部と言ってよい程が先輩教授であり、しかも実力があり、さらに年齢は四十歳台であり、最も張切った時代であった。病理の佐々先生、右手掌を右頬にあて、やや横向加減の姿勢での名講義。

薬理の原先生の机の上の教科書を両手で抑えつけるようにしながらの判り易い講義ぶりも格調の高いものであったし、解剖の故佐野先生の黒板に書かれるちと風変りな字は印象的だった。（最近先生は書道の大家であられたことを承知し、なるほどと思っている）その他の諸先生の想い出は紙面の都合で割愛させていただくが、毎週土曜の午後受講生がさぼって少ない時間の緒方知三郎先生の名講義は「パロチン」の名とともに忘れられない。

一方、校友会活動も活発だった。委員長桜木四郎氏は応召した。私たちの一年上級の丸茂重貞氏が委員長の時は大学昇格に熱をあげ、例の雄弁は定評があり、今日あるは当然と思われる。さらに軍事教練も徹底し、毎年富士や仙石原などで野営が行なわれ、配属将校のもと、厳しい訓練を受けた。

昭和十二年六月、蘆溝橋事件勃発の一ヵ月前、校長佐藤達次郎男爵が教頭西海軍々医中将を伴って私たちが野営していた富士滝ガ原廠舎を訪れ、時局重大のおり諸君に期待するところ大なる旨の訓辞を賜った。当時としては異例と言うべきである。

そして昭和十三年九月にはまず須田朱八郎君に赤紙が来た。同君は翌十四年四月出征した。同年三月には赤羽輝義君も応召している。恩田威明君にも召集令状が来た。四年の時は、卒業を待たず杉森、坂口、野田、板倉君らが入営した。

その前の頃から当局の取締りは厳しくなった。遅刻登校途中伊勢丹を通り抜けようとして逮捕され、留置された級友もいた。一度に数十人が検束され、指導教授が貰いさげに行かれた事すらある。

このように、ようやく時局重大、いつ戦列にわが身が加わるか判らないと覚悟のほどを決め、昭和十六年四月、私たちは四年制最後の卒業生となった。したがって、昭和十六年は秋の卒業生もある。

卒業後、既に軍籍にある者は早くも召集された。そして依託生はもちろん、丈夫なものは短期現役で入隊した。私は橋本健一、渋谷友太郎、小竹観一郎君らとともに弘前師団の北部第十六部隊に入隊した。

昭和十六年十二月八日早朝、私たちは将校集会所の食堂でハワイ真珠湾奇襲攻撃成功のニュースを聞いた。そして、日本はアメリカに対して宣戦を布告し、ここに大東亜戦争の口火がきられたのである。かくして異常な緊張の裡に私たちは、間もなく陸軍々医少尉に任官した。私一人弘前師団に残され、橋本、渋谷、小竹君その他同期の十八人はすべて第一線に出陣して行った。弘前師団に残った私は間もなく小竹君の戦死の報に接した。

その後の事は私事が多いので省略するとして、敗戦の色ようやく濃くなりつつある時、あたかもサイパンの激戦の最中である昭和十九年七月、私は独立混成第五十八旅団に属し、フィリピンのルソン島に上陸、リンガエン湾に布陣した。

そして昭和二十年一月六日、リンガエン湾に一夜にして艨艟八百と称する敵艦を迎え、ここにルソン作戦は開始され、爾来転進に転進を重ね、北部ルソンの山中で終戦を迎えた。

その間に知り得た情報は、母校に関することでは、緒戦リンガエン湾の激戦で、丸山進中尉、同じく北サンフェルナンドで先輩藁科弘中尉、昭和二十年五月、ボンドック街道五十二キロの地点で同じく先輩塩谷祐之見習士官がそれぞれ壮烈な戦死をとげたことである。

そして、当時母校は如何様になっていたか、恩師はいかがお過ごしだったか知る由もなかった。

18　学生時代の思い出

古守豊甫（昭和十八年卒）

昭和十五年の春、私は東医に入学を許されたが、この時の感激は終生忘れがたい。相撲部には太田重行君とともに、古石、大池両先輩の勧めで入った。四年生には佐藤、坂口、相馬、小野氏らが、三年生には田島拓自氏がいた。このうち田島、大池、太田の三兄は今は亡く淋しい。当時国技館における関東学生相撲大会は特筆に値する。わが東医からは西団長指揮のもとに応援団が国技館に行き、「ハイザー東医」を叫び、各校の応援合戦で国技館は割れんばかりであった。私も初めてここの土俵に上った時は、責任と緊張のため、たった一番で非常な疲労を感じた、学生相撲の今昔、まことに感に堪えぬものがある。

「どこまで続くぬかるみぞ」の軍歌の如く、支那事変は果てしなく拡大され、軍国の嵐は日一日と荒れて、楽しかるべき学生々活も当然緊張の度を加えざるを得なかった。私は抜弁天近く若松町に内田健三郎、芦沢文比古両兄と下宿していた。相撲の猛稽古が終り、近くの銭湯で一風呂浴びるとすがすがしい気持でそのまま西向き天神を参拝。散歩しながら下宿に戻るのが習慣だった。当時は着物に袴をつけていた。爾来二十八星霜、西向天神

には大東亜戦争戦没者慰霊碑が建っている。昨春物故された佐野教授の揮毫になる丈余の石碑である。碑前に立って往時を偲びつつ時代の変遷興亡の急なるに驚く外はない。

昭和十六年十二月八日早朝、「おい、戦争が始まったぞ」と言う同室の芦沢君の声で目をさました。一瞬、名状し難い感動にうちふるえた。とうとう来るべきものが来たという感じだった。程なく東条首相の「国民に告ぐ」という放送がラジオを伝わって流れた。

この朝登校すると、学校は人心動揺して講義もろくに手につかぬ有様だった。正午近く「真珠湾の一大奇襲作戦成功」のニュースが伝わるや、期せずして校内一斉に歓声が捲き起った。薬理学の講義に出ると。原教授は開口一番、「私は今朝、戦争突入のニュースを聞いて、異常なショックを受けた。しかし決してああ参ったというそれではない」と念を押された。言外の意味を暗示するかのように……。

その翌日、日比谷公園では大東亜戦争完遂国民大会が行なわれ、われわれ東医二年生は全員隊伍を組んでこれに参加、東条首相の演説に万雷の拍手が起り、軍国の嵐はまさに最高潮に達した。これがやがて余りにも悲惨な敗戦につながるとは誰が想像したことであろう。数日後、校内においても戦争完遂学生大会が開かれ、円山良荘氏をはじめ多くの学生が壇上に立って米英撃滅を叫んだ。太田重行君も少しどもりつつ一席やった。

その後間もなく全学生が断髪し、各軍需工場への勤労奉仕作業が始まった。ある寒い夕刻、国民服姿の佐々教授が慰労に来られて曰く、「諸君、今日は疲れたろう。帰ったら、うまい物を食って休んでくれ」と。食糧はようやく欠乏を告げ、下宿で空腹をかかえて寝た。

昭和十七年四月十八日、米軍機は突如東京を空襲した。驚いて校庭に出ると、鉛色の敵機は新宿方面に去った

あとであった。この時佐野教授が「あっ、あそこにも敵機」と天の一角を指さして叫ばれた。

軍事教練は強化され、習志野、富士の裾野などに演習に行く一方、田林教授は防空訓練を担当、ヒットラーを思わせる颯爽たる防空服に身を固めて指導に当られた。ある時学生の集合が遅いと一喝されて曰く、「この一刻の遅延が東京を一瞬の裡に灰燼に帰するのだ」と。この予言が的中したことは知る人ぞ知る。細菌学の竹内教授のマラリアの講義は一同特に熱心に聴き、ラバウルでは大いに役立った。

同年春、同僚の中山正辰兄は再度の召集令状で出征した。私はそのあとの十和荘の一室に移り住んだ。ここは現在の厚生年金会館のある所で、和田右門、鎌田泰輔君らがよく遊びに来た。山田嵩兄ものちに移り住んできたが、一晩彼のいびきで閉口したことがある。

世は日一日と物資が欠乏し、相撲の稽古後身体を洗う石けんにも困り、街には支那そばの屋台も姿を消すという状態になった昭和十八年九月、繰上げ卒業し、あわただしく私は九州大村部隊に入営、翌十九年早々南方ラバウルに向って出征することとなった。

昭和二十一年九月、私は廃墟の東京を眺めつつ再び母校の校庭に立ち、次の歌をくちずさんだ。

大久保に戦災の跡尋ぬれば　われらが母校つつがなく立つ

三歳みぬ母校の前にわれ立てば　東京医大の墨痕鮮か

この陰にはわが相撲部の和田右門、鎌田泰輔君ら、多くの学友の決死の消火活動のあったことを聞き、感激を深くした。最後に私は洋々たる前途を抱きながら、空しく戦場に消えた同窓生の慰霊碑が母校々庭の一角に一日も早く建てられんことを祈念してやまない。

19　戦時下の学生生活

児玉三磨（昭和二十年卒）

私たちのクラスは昭和十七年四月に入学して二十年の九月に繰上げ卒業をした。支那事変から大東亜戦争と拡大していった戦争の歴史が、即わちれわれ学生時代のすべてだった。二十年の歴史ある校友会の解散、報国団の結成、東京初空襲、勤労奉仕、雑炊食堂に国民酒場、コブ茶と乾燥バナナの喫茶店、学徒出陣と軍医学校入校、東京大空襲、学校疎開、東大久保校舎は警視庁に賃貸、そして終戦。今ふりかえっても青春時代の甘い思い出はない。よってここにその思い出の代わりに、恩師のプロフィールの一端を記する次第。

独語・道部順先生―グレーチヘンのファウスト。ファウスト以外にドイツ語の記憶はない。

数学・井上清恒先生だったが高等数学の先生―「オーイ、坊っちゃん、昔わしが高校時代寄宿舎の二階から小便をしたらじゃ、小便はホーブツ線をえがいて下の木にパラパラとかかった。ホーブツ線のことはパラパラと言うのじゃ。分かったナ。」一見土建屋の親方風の秀才先生。

解剖・井上通夫先生――「グランドゥーラーパロチス。管は上の方から次第にさがって、ツンゲのまったき

面にそそぐのであります。」黒板に書かれた解剖の図、風呂敷きにつつまれた本、これ皆脳みそというような先生の頭、……すぐに思い出せる先生。

解剖・佐野幹先生いつもシェーデルを連想させた。学者でない時の先生はやさしく、好きだった。「雪のふる町を……」うたごえはまだきこえる。

生理・福田邦三先生—「まー医専の諸君には、これ以上の講義をしても無理でしょう。」インギン無礼という言葉を一緒に思い出す。

生理・久保盛徳先生—お顔の色のみ今もはっきりうかぶ、日本人には南方民族の血が混じっている。

医化学・三坂亮雄先生—赤味をおびた丸顔、夏でも手の甲をとてもよくこすられた。坊っちゃんのような先生だった。

薬理・原三郎先生—「諸君の中に養子にいく希望の方はいませんか。言いにくいことですがTBの患者が五人、麻薬の固定患者がかなりあります。内科で食べていけるところです。医者の養子を世話してくれと、言って来ました。こういう医者もあります。では講義に移ります。〝処方とは創作である〟……」。文学の分かる大医学者。

病理・緒方知三郎先生—「ドイツで目がねの玉にアイテルをぬって染色して見たネ。ゴノじゃないかと心配したヨ」今はマジシャンクラブの会長。

病理・佐々一雄先生—右腕で教壇の横の蛇口にぶら下り、左手で何べんもていねいに頭をなでて、声が小さいので講義はよく聞きとれないが、おつむがだんだん光って来るのは良く分かった。

細菌・竹内松次郎先生—検事さんから講義を聞いているような印象が強かった。

細菌・中山政晴先生―そのせいか、中山先生は弁護士さんのように思えた。

法医・浅田一先生―マイクロホンと携帯用痰壺。咳が気になって、なるべく遠くの方で講義を聞くことになっていた。

内科・藤井尚久先生―全身これ神経と言った感じの先生。「今日は神経が非常につかれています。」と言ってはじまる講義には、聞く方もとてもつかれた。

内科・岩男督先生―偉大なる学者だったと言う印象が今も強いが、なぜ買出しのリュックをしょって病院に来られるのか不思議な先生だった。

内科・荒井恒雄先生・森戸耕作先生―開業医が講義していると言う感じが強かったが、ためにはなった。

精神科・村松常雄先生―「ゲズンドではあるがノルマールではない。ノルマールではないがゲズンドである。」何のことか良く分からない。聞いている学生はみなアップノルム。精神科の医者だけにはなるまいと思った。

小児科・清水茂松先生―ほんとに立派な先生でよい講義だったが、忘れるのも早かった。ぜんそくのような息苦しさで、ていねいに話して下さった。

外科・藤田小五郎先生―近眼がひどいのか、活字が小さいのか、とにかく本をなめながらの講義、それも機関銃のような早さ。調子のよいわりに試験の点数はひどく辛かった。当時の学生にボイコット運動を起こされたただ一人の先生。

外科・木村敬義先生―ゲートルを巻いて、佐野先生のアッペを切られた姿は、今の若い外科医には想像もつかない。戦時下型の先生だった。

外科・篠井金吾先生—はじめての外科学の講義、小川蕃著の本を一字もまちがわないでただ読むだけ、よって聞く必要なし。偉大な学者もその初歩時代は正確さを旨とした。これを脊に晩年よくひやかしたが、その先生も今は亡い。

外科・佐藤清一郎先生—洋行帰りのドクトルと言う印象のみ強いが、教えをこう時間が短かかった。

外科・近藤潤平先生—ダブダブの服に大きなカバンをブラブラさげて、人が良いと言う感じの外科の古いタイプの先生だった。

整形外科・野崎寛三先生—雄弁家は昔ドモリだった人に多いと聞く。大久保病院時代からお世話になった先生、今もなお続く。

皮膚科・小池正朝先生—「ハウトの……」大きなよい声だった。

皮膚科・広田康先生—はげているのに禿頭病の患者をよく診ておられた。ヤスラハゲの大家なのか。陸軍の高級将校が内緒で入院していた。

泌尿器科・田林綱太先生—「老いたりと言えども、源の朝臣(あそん)田林の綱太……」マイクロホンのいらない立派な声。ただ、「サールバルゾイレ」にはみなびっくり。

婦人科・清水由隆先生—何となく印象にのこりにくい先生。

眼科・馬詰嘉吉先生—ウマヅメ先生とおよびするとは全く知らなかった。「生麦、生米、生卵」早口言葉のような名講義は今も思い出す。

放射線科・本島柳之助先生—パリジェンヌにもらった時計のクサリを見せてのひとくさり、港についた時、〃あ

なたはお国を出る時のままの姿でお帰りになりましたか〟とフラウに聞かれたら、僕は〝ナイン〟と答えるほかはなかった。しかし賢明な妻は、そんな事は聞かなかったゼ……。毒舌家だったが早逝されたのは惜しかった。

耳鼻科・広瀬隆先生―今こういう先生がおられたら学生騒動など起こらないだろう。教授と学生は親子か兄弟のように親密だった。終戦後、先生の采配で、故楠原正秀氏（同級生楠原正規君のご尊父）のご寄贈の木を、八幡山から馬車五台で運び、われわれのクラスメートで東大久保の校庭に植えた。その木も、今は大木となって校庭の周囲に青々と生い茂っている。

20　勤労奉仕、疎開から大学へ移行の時代を思う

矢野成敏（昭和二十三年卒）

〝他所で風呂によばれたのはいいが、ぬるくてあがるにあがれない状態〟と名言がささやかれた。戦後予科設置の問題があった飯田市、遠く信州のここに戦時中疎開したのが私たちのクラスで、飯田までの旅費が十円という昭和二十年四月のことであった。

私たちの学生々活は大東亜戦争の戦局に敗色のきざしをみせた十八年にはじまり、十九年には勤労動員、その年の終り頃から空襲の激化で防空活動、その間級友から学業半ばで出征者を出し、疎開先で学業を続け、終戦を迎えてからは二年半にわたって最高学年をつとめ、東医として最初のインターン制のもと国家試験をうけて、やっと世に出たまこと食うや食わずで、数奇の運命をたどったクラスである。

※

東京空襲の熾烈化は昼といわず夜といわず警報が響きわたり、生活は極度におびやかされ、あちらこちらに焼野ケ原が出現するにいたった。

東大久保の校庭でみた、夜空にB29の大きな影を追って小さな日本の戦闘機がみるみる追い迫り、瞬間火の玉となって消えていった壮烈な特攻の光景――学校の近くのアパートに住み込んで、警報の鳴るたびに先を争って学校にかけつけた私たちクラスの挺身隊――昼夜ゲートル、防空頭巾をつけたままでがんばった私たちの記憶に、いまだなお生々しい光景である。

被害はようやく学校にも及び、先に八棟を焼失し、二十年五月の大空襲で残った本館を火災から守ることができたのは、原先生の指揮のもと、その意気愛すべきわが挺身隊の働きが大きかったことを誇りにしている。

あのとき校庭に林立した焼夷弾の残骸をみて、よく学校が残ってくれたものと感慨ひとしおであった。今でも本館をあおぐたびに〝これは私たちのものである〟と特殊な感情を私たちに強く残しているのである。

※

戦局の苛烈化につれて、医学生も勤労動員され、世をあげて黄褐色の菜っ葉服の日常生活となった。

私たちのクラスは小岩の奈須アルミ工場に勤労奉仕――炎天下、圧延の現場では向うに立つ人の顔も熱気でゆらいでみえる暑さで、アルミ板を投げおろす騒音とともに、想像を絶する勤労奉仕であった。

この動員は夏休みだけでなく学業期にまでおよび、王子付近で材木運びなど――何のために学校に行っているのか分らない迷いをもったものであった。

※

学問にあっては十九年二月、軍事教練の全面強化が謳われ、運動部は難しい漢字の名前に変えられ、対抗試合も禁止される羽目になった。文化部は圧迫され、予算は減らされる一方であった。原文化部長のもとで古典研究

会を新しく作り、予算の確保につとめたのも苦しまぎれの今から考えればささやかな抵抗であった。吉岡先生の肝入りで体操部ができて、毎朝全員柔軟体操をやったのも、当時在学の諸君に覚えのあることと思う。

※

私たちが三年になった時は、学業を続けるために疎開をしなければならない状態になっていた。二年生とともに遠く東京を離れて、飯田の地で、実習は飯田病院と高安病院、西沢病院で、講義は小学校の裁縫室などでと、長期持久戦のかまえから芋をつくりながらの寮生活が続いたのであった。

一年は基礎の先生方と一緒に長野の湖東村へと疎開、臨床の先生方は清水先生団長の飯田と、付属病院組と、学校はまるっきり三つに分れ、当時まことに暗澹たる教育状況であった。

ここでの寮生活は大部分のものに苦しいとまどいを覚えさせた人生経験の一コマであったと思う。しかし、そこはそれ若い者の集り、それなりに土地の娘さんとロマンスの花も咲いたように聞いている。高名の先生が血を吐いて倒れ大騒ぎしたのもこの時、酒がなくてブドウ酒を呑んだせいで、このような話が思い出話にでてくるほどのどかな面もあったのである。

話があと先きになるが、卒業後二十年になろうという去年、ともに苦労した一年下のクラスにも呼びかけ、疎開当時お世話になった方々に感謝をこめて、飯田市でともにクラス会を開いたのも私たちのクラスならではのことで、当時の経験が私たち級友の胸にそれぞれ何かを残して今に至っているのである。

この疎開の時、東京に残ったクラスの一部は病院の防空要員として昼夜をわかたぬ空襲の下で、授業に防空にそれこそ不眠不休の激しい毎日を送った。中野方面が焼けた大空襲の時、馬詰教授指導のもと目覚しい活躍で病

院を焼失防止した功績のその一翼を私たちクラスのものがになっていたのである。

※

戦後、学問に全学懇談会がもたれ、民主的な組織として学生も出席するようになった。種々の重要事項の打ち合わせに先生方の名言が聞けたのもこの頃のこと、とくに当時助手団の若い先生方の発言は学校を思う情熱にあふれ、折りにふれ思い出して今も感慨深く記憶に新しいところである。

私たちのクラスはＧＨＱからの指令で一年延長の憂き目をみた。あまつさえインターン制度国家試験と制度の改変がおおいかぶさってきたのである。

多年念願の大学昇格がきまった後、二十二年にいわゆるＡＢＣ格付けの大学の存廃問題がおこり、私たちは学園をあげて校舎の清掃――外装のペンキ塗りかえ、廊下、壁のふき掃除――まで一生懸命やって、ちょっとやそっとでは味わえない変った思い出をもつのである。

この問題では東医が全国各大学との連絡の中心になって動いたもので、当時のわが学友会の活動はすばらしいものであった。一緒に苦労した各学年の委員諸君の面影は今も眼前に彷彿としている。

一年延長の決定は、あの頃の想像を絶する食糧難、住宅難の時勢に、学生にとってインターンの一年とともに大変な問題であった。これを何とかしようと〝法は既往に遡らず〟を楯に、ＧＨＱに、国会にと走り廻って懸命に働きかけた。

ＧＨＱから試験の最中に呼び出されてやむを得ず出頭、次の試験に間に合うよう役所の車で送り返してもらったのも今は嘘のような思い出である。

ほかの役所とちがって、敗戦の中に権威に屈せず、陰になり日向になり援助してくれた終戦連絡事務所のことは、当時には有難く、大変心強かったことで、生涯忘れ得ない感銘を受けたことであった。

当時まだ残っていた指令で一年延長を改変されることなく、国会で審議してもらえるように各党の政調会長を訪ねて体当りで窮状を訴え、こと成就の段取りにまで運んだのが、衆議院解散にぶつかって一挙にフイになり、断腸の思いをしたのも今は遠い思い出となってしまった。

戦中、戦後の学生々活を送った私たちクラスの当時の思い出は縷々として書きつくすことのできない、まこと数奇のものがある。

この運命の中で、東医の自主自学の精神を柱に頑張った私たちのクラスは今、中堅医師として世に問うところにきている。かつての経験は意識するとしないを問わず、同窓の中で特異な存在として、私たちクラスの結束がそのまま母校の発展に役立つよう今後ともの活躍を念じあっているものである。

21　戦後初期の在学時代の思い出

（A・B　問題を中心に）

菊田能敬（昭和二十六年卒）

私は戦後昭和二十一年四月入学し、昭和二十六年三月に卒業した。

有史以来初めて敗戦と言うみじめな思いにかられた直後に送った時代だけに、その思い出は多い。われわれは終戦の翌年に入ったため、陸軍士官学校、海軍兵学校その他軍人関係者だけでも二十数名を数え、さらに外地よりの引揚者、あるいは軍需産業に従事した者、歯科医あり、薬剤師あり、全く多士済々であった。四十をすぎた者もおり、平均年齢二十五歳を越え、先輩に弟が在学中という者が数名もある珍現象が見られた。

そのわれわれが入学後間もなく起ったのがA、B問題である。当時占領下にあったため、GHQからの指令で全国の医学校を調査し、ABCの三クラスに分け、Aはそのまま存続、Bは条件つき存続、Cは廃校にせよというものである。戦火に見舞われ、うす汚れた本館の地下室にわれわれが集まり、緒方学長以下教授陣を取りまき、わが校はどうなるんだと迫った事を思い出す。泌尿器科の田林教授が机上にとび上り、「諸君よ、母校設立の精神を忘れるな、立ち上れ」と檄をとばされ、熱涙くだる演説をされている。学校には整備すべき金もなく、

吉崎、大久保らとともに対策本部を作り、われわれ学生の手だけで再建をはかった。ある者はカメラを売り、ある者はオーバーを売り、ある者は先輩を訪ねて資金の調達をはかり、数カ月の間に母校本館の外装工事、内装工事をやってのけた。図書館の整備には薬理の原教授が陣頭指揮され、生理の伊藤助教授らとともに本の整理、ピンポン台にニスを塗りペニヤで仕切りをつけて閲覧室の設備をしたり、全く大変であった。調査の当日は大八車を押して新宿の喫茶店から植木を持込んで飾り、GHQのサムス准将をして「一片のチリなき清潔な学園である」と言わしめ、Aクラスに入り、快哉を叫んだものである。

一方外に対しても全国の学校に呼びかけ、檄をとばして慈大に集まり、その対策を協議、文部省に抗議を行なった。順天堂の高岡君だと思うが「われわれに命を捧げて国のために戦えとさとした貴方がたが、今戦い敗れて再び医学の勉強せんとするわれわれの学校をつぶすとは何事か」と文部省松井大学課長に涙を流して迫った。

また本館の外装工事を請負った会社がインフレのため、われわれの契約した金額より実際の工事費が二倍にもなり、その返済を迫られたり、後日その責任を問われた会社の専務に同情して、彼の義父である代議士（東京六区林連）の応援演説にクラスから十数名、無報酬で二週間も働いた事も思い出の一つである。

当時はインフレで物価も日に日に上り、学生々活も苦しかった。二年先輩の松葉氏、一年上の森下氏、われわれのクラスから竹内、新海らとともにつくった学生協同組合も特記する一つであろう。学生有志から資金を集めて組合をつくり、学校の前に店舗を借り文房具の販売を行ない、その利益で困った学生数名の学費をつくった。

学生時代をなつかしく思い出し、感無量なものがあるが、現在のめぐまれた後輩たちを見、学生運動の姿を見る時大きな時代の流れを感ずるとともに、何かなさけない気がしてならない。もっとしっかりしてもらいたい。

22　終戦直後の在学時代の思い出

網野　三郎（昭和二十七年卒）

われわれの母校東京医科大学大学史に見られるように、先輩によって建学されてから五十周年を迎えるにいたり、現在においては諸医科大学に規模においても、また研究面においても、堂々と肩をならべつつあることは喜ばしいことであります。

私ども、昭和二十七年専門部最後の卒業組の入学当時は、第二次世界大戦の終結となり、社会状勢もまだ混沌とした頃で、新宿の町も屋台飲屋、客引き女の多い所で、二丁目遊廓の華やかな町でした。入学者も憲兵中佐を初めとする軍人復員者、外地医学校からの転校者、歯、獣医よりの転向者、C級指定廃校のための転校者などの混入した特殊クラスで、入学当時平均年齢二十四、五歳という〝おやじさん〟学級でありました。年齢的、また社会的な面もあったのでしょうか、比較的勉学には真面目人が多いように記憶しております。

当時の東大久保の学校は、本館と隣接した木造校舎二棟程度で、病院の外来も現在の大学院研究室を使用しておりました。私どもは一般教育のため、一年間保善商業校舎で講義を受けましたが、二年になり本校で基礎医学

の教育が始まりました。

特に記憶に残っている二、三の教授には、薬理学担当の原教授が本学の建学の経過と東医精神を滔々と教えられたことは深く印象に残っております。病理学の所教授の名調子講義に酔い、帰宅してノート整理に手間どったこと、また解剖学の井上教授がハイカラー、フロックコートでプリントと一言一句間違いのない正確な講義が印象に残っております。

臨床医学においては、簡潔無比、ポエム、センスの充溢した一種独特の発言をされた名調子の講義をされた放射線医学の本島教授が深く印象に残っております。

以上、在学時代の印象の一端を記しましたが、過ぎし日は早く、卒業して十七年目を迎えておりますが、私ども二十七年卒業組もますます盛んに躍進して本校発展のために微力ではありますが、協力したいと願っております。

23　満州から引揚げて母校を得た思い出

今園義盛（昭和二十七年特卒）

昭和二十年八月、終戦と同時に外地にあった日本人医育機関も、立派な施設と貴重な研究文献などを残して潰滅してしまった。私どもの旧満州国立の学校もその一つで、卒業生及び在学生も身体一つで内地に引揚げて来られた人たちは幸運な人で、応召して戦病死した者、ソ連に労働資源として引張られ、極寒と栄養失調と労働の残酷さに無念の涙をのんで、シベリヤの土と化した若い多くの医師が含まれている事を忘れることはできない。

日本内地に辛うじてたどりついた者も、住むに家なく、食糧事情も極度に悪く、放心状態であったが、敗けたりといえども祖国日本であった。漸次生気を取り戻し、物資欠乏の中から医師として立ちなおる事ができた。私は幸いにも昭和二十三年の暮には日本の土を踏むことができ、先輩のはからいで二十三年三月から東京都医員として、都立衛生研究所に奉職できた。その年の十月から東京医大寄生虫の室で研究するチャンスができた。次々引揚げて来た同窓生も、全部開業の資格は持っていたが、戦争中の学問の遅れを痛感し、勉強する機会と場所を希望する声が非常に多かった。ちょうどその頃、私の上司として現東京医大霞ケ浦病院長中西教授が、衛研の課

長として来られたので先生に私どもの苦情を訴え東京医大で勉強できる機会を与えられたい旨懇願したところ、中西教授は早速学校当局と仲介の労を取られた。私は何回となく佐々先生、三輪先生、当時の木村教務局長と強引に交渉してお願いしたところ、教授会も承認となり、特設研究科の一クラスが設けられ、各科の教授から懇切丁寧な指導を受け、戦後の新しい学問を身につける事ができた。東京医大専門部卒業者として待遇を受け、昭和二十七年に揃って卒業した。同窓生の一員として地域社会において、医師として処生できることは誠に感謝にたえない次第である。

その後研究科修了の多くの同窓が母校で臨床に、あるいは研究室に勉強して、学位を授与された者も数多く、現在はその子弟を母校に入学させ、在学中のもの、既に後継者としている人も多く見受けられる事はこれを起案した私としては誠に感無量のものがある。あわせてこれの実現に親身にご尽力を戴いた中西謙三教授には終生忘れることのできない感謝である。

いま母校は五十周年記念式典を終え、その半世期にわたる医学教育の歩みは、私学医育機関として燦然たる輝きを残してきた。この母校をいやがうえにも発展させ、次の時代に躍進させるには、われわれ同窓生が緊密なる連絡をとり、団結を固め、温かく見守り援助してゆく事が最も必要な事であると考える。同窓会が五十周年記念事業として学校に建設した記念会館は内容外観ともに超一流のものができ、まことに同慶の至りである。しかし残念な事は二年間で集まる予定の建設資金が、初期目的額に達せず、さらに二年延長して、同窓生の援助を必要とし、これが募集に学校当局、ことに佐々先生、原先生が心配され、この点、三輪先生も生前非常に心配されて他界されたと伺い、心痛の極みである。

24　我が在学時代の想い出

白石　和（昭和二十八年卒）

私どもの在校時代は、昭和二十二年より昭和二十八年の六年間であります。

東医五十年の歴史上最も大きな変換期に在校したわけです。

昭和二十二年四月、東京医専より念願の東京医大へ昇格し、われわれ五十名が第一期生として入学致しました。この期には学部一、二回生が一緒に入学、ほかに専門部最後の方々（外地医科大学よりの引揚者）も入学致しました。一回生は医専の一、二年修了者と、一般高等学校（旧制）、高専、軍関係諸学校より入学した者がおのおの半数ずつくらいいたと思います。

当時学長は緒方先生、予科長清水茂松先生、教務主任は木村教雄先生でした。

大久保の校舎は専門部の学生がおられましたのでわれわれの教室はありません。このため予科の教室は大久保の戸山原にある保善商業学校の三階に間借りという事になりました。

新宿より大久保にかけては完全な焼野原、ときどき大久保の校庭に立ちますと、山手線を通る電車が西日を受

けて黒いシルエットを描いて走っておりました。大久保駅より学校までは線路沿いにバラックを除いては満足な家は一軒もなく、吹きさらしの中を毎日通学したものでした。

ここの生活も一カ年、今の進学課程の鉄筋校舎の所に新築の木造校舎が完成し、われわれは喜び勇んで新校舎に引越し致しました。全員でトラックに乗って机や黒板を運んだものです。

三期生が入学致しました時は、教授以下全員で丸子多摩川の丘陵で歓迎会を開催し、楽しい一日を過した事を思い出します。予科時代の先生方は専任教授を除いては東京女子医大の関係の先生もいられ、現在ならさしずめ両校でパーティでもという事でしょうが、当時はそんな才覚もうかびませんでした。

皆様が大久保の学校へ行かれますと、校庭の周囲にヒマラヤシダ、欅、栃の木、公孫樹が時に青く、時に黄色の葉を茂らせているのがおわかりと思います。当時は本館前の木が残っているのみで、周囲も緑は全くありませんでした。この焼野原に少しでも緑の潤いを与えようと相談し、現在の新宿のガードの西口にある武蔵野園芸にアドバイスを求め、植樹をした次第です。あの木々を見るにつけ、二十数年の歳月を痛切に感じます。当時は木を植えるにもまずシャベル、鍬の類は全くありません。そこで新宿の都市清掃事務所へ借用に行き、拝借物で生徒が全員で穴を掘り、水を運び一本一本植えていったものです。真夏のことで鈴を鳴らしながら来るアイスキャンデー屋からキャンデーを買い、これをしゃぶりながら仕事を進めました。植木代は父兄会費から出たものと思います。

学友会の方は予科ができますと同時に、年長の故をもってか、大学の代表として副委員長になるように言われ、学部二年生まで連続してやりました。専門部の方々が卒業されると、委員長に選出されました。副委員長は

二期生の黒田君、三期生の相沢君があたりました。文化部、運動部ともなかなかの活躍で、特に野球部、相撲部、馬術部などが目立ちました。

当時は学生ホールなどはもちろんありません。特に病院では講堂で食事をする有様でしたので三輪先生と交渉致しましたが、今から考えると学校もよほど余裕がなかったとみえて見事断わられました。かくなるうえは独自で建築せんものと一年間の学友会費を棚上げしてこれに当てる事に致しました。運動部は同級の久米君、文化部は宮川君でしたが、これを了解してくれました。そして建築の実施案を持って三輪先生に報告しましたところ、先生しばらく沈思黙考しておられましたが、「よし、建ててやろう」と一言。その時の先生の温顔が今も深く脳裡に刻まれております。その建物は階段教室と東病棟との間にあるもので、現在は内科の研究室になっているそうです。

先生方は予科時代は、道部独語、木村数学、岡崎英語と各主任教授のもと、大部しぼられました。特に予科三年生では解剖、生理学が始まり、専門部より来た面々は二度目で楽のようでしたが、ほかより来た者たちは大部面喰いました。

卒業式には例年の優等生制度を廃止し、卒業生は五十名でしたので、一名ずつ学生より卒業証書を受領する形式に決定したのもわれわれの代からでした、

昭和二十八年、ようやく敗戦からの混乱を脱却し、一筋の道へ邁進できるようになったのもこの頃からと思われます。本学も規模、内容ともに一大飛躍をとげはじめた時期で、その発展段階をこの目で見、肌で感じながら学生時代を過したものです。

25　予科時代

工藤武彦（昭和二十九年卒）

その頃、学校へ通うことはあまり気がすすまなかった。教室を見渡すと軍隊帰りの勇ましい髭面と坊主頭がならんでいて、国防色ひといろの殺伐な風景は、中学校を中退して入学した十六歳の私にとって、およそ勉強の場とかけ離れたものだった。だいいち大学予科に入学したというのに、人に聞かれて保善商業学校の校舎で勉強していると答えるのも癪だった。方言もいけなかった。敬語といえば「おめさんなっす」という岩手県は花巻の言葉か、せいぜい「あのなはん」という盛岡の標準語しか話せない幼い耳には、周囲の会話はみな都会人の垢抜けたそれに聞えるのだった。いま思えばどれもこれも方言訛りの強い、まだ固まらない東京弁に過ぎなかったのだが、それでも私の気を滅入らせるに充分だった。

第一回の東京医科大学の募集に応募した昭和二十二年といえば、巷間未だ敗戦の傷痕が濃く、文字通り衣食住に困窮している頃で、人々はスケソウ鱈の配給とカストリ屋台で明け暮れしていた。武蔵野館のならびに渋谷食堂が開店し、すぐ評判になってなかなか嚙み切れない中華ソバを売出したのもその頃である。私は憂鬱な教室を

しばしば抜け出してバラックの紀伊国屋をのぞき、柳橋、志ん生、可楽を聞きに末広亭に通ったものである。そして中学校で熱中していたバレーボールの試合をみて歩いては、母校の後輩に新らしいテクニックを書き送っていた。何しろ医科大学の講義とはいってもまだ当時は医の字に接することはなく、仏教、文学、体育、物理、数学と、英独仏エスペラントなどの語学がすべてであった。

それがいつ頃からであろうか。教室に馴れ言葉に馴れてくるにつれて自然に学校にいる時間が長くなった。学部一回生と私ども二回生は同時に同じ試験を受けて入学し、教室も両者合せてA・B・Cと組分けされ、それぞれの教室で同じことを習っていたが、いま思うとこの仕組は専門学校から新らしい大学への脱皮に貢献したと考えられる。

保善商業の屋上に屯(たむろ)していた一回生の間から話が出て、やがて制服制帽、それに柏葉三枚の徽章が作られ、白線帽にマントという過去の旧制高校の姿ができ上ったが、それが長く続かず東大久保の校舎に移り住んで間もなく消えたとはいっても、少なくともお互いの連帯感を強めることには役立ったと思う。

当時の懐かしい講義の一つに道部順先生のドイツ語がある。アンデルセンの「絵のない絵本」をテキストとして使っていたが、なかなか厳格で級友の一人は辞書を取上げられ、頭を一つ叩かれてからそれを三階の窓から表に捨てられた。私どもは一斉に首をすくめたものだった。やさしい先生として岩井ソウ先生を思い出す。復員したての凸凹を集めて英会話を教えるなどということは女の身として相当に勇気を要したことと察するが、今もって私は tantalous（焦(じ)れったい）という言葉を覚えている。英語を教えてくれた岡崎先生は熱血の士で時間いっぱい吼えたてた。口唇、鼻孔、頬の筋肉を自在に動かして読みあげたが、私はその表情に見惚れて結局何も覚え

ないどころか外国語とは極めて難かしいものという印象が脳裡に焼きついて未だに洋書は苦手である。数学はボックスと呼ばれた小林先生と、タンジェントといわれた木村先生とに教わったが、どちらも非情で、お蔭で成績は上下振幅が大きくて弱ったものである。

東京医科大学予科という制度は、本学では大学認可以来、現在の二十八、二十九、三十年卒業生が学んだ三年間しか続かず、再び新制大学となり二年制の進学コースに変ったが、思うに私どもの経験した予科三年間は、日本としては学制改革の動乱期であり、東医としても旧制脱皮の揺籃期であったと思う。

当時の清水茂松予科長や緒方知三郎学長らの新らしい教育方針によって自由な風潮のなかで医師となるための情操が培われ、多感な三年間を終ったときには強烈な自我の発見と母校への愛着が芽萠えていたように思う。

あれから二十有余年、保善商業三階の間借り校舎から本学木造校舎に学んだ予科生たちは、それぞれ所を得て名を成しているが、予科時代の思い出には共通の哀愁があるはずである。

昼休みともなれば長岡屋で、無料のソバ湯ばかりすすった貧困の終戦時代とはいえ、私にとってはやはり良き時代の良き大学であった。

26　旧制度の学部に学んだ頃

――昭和二十六年より三十年までの本学の印象――

渋谷　健（昭和三十年卒）

私が学部に入学したのは昭和二十六年四月で、大学医学部としては三回目であると同時に旧制度コースの最後でした。クラスの大半は予科の出身者で、昭和二十三年に予科の一年に入学した者、二年で編入した者が学外の高等学校、あるいは専門学校卒業者とともに学部の入学試験を受けて医学部へ進学したわけで、他学年との知り合いも多く、極めてなごやかな雰囲気でした。当時大学は振興の意気に燃え、緒方知三郎学長の「日本一の医科大学造り」をモットーに、ことあるごとに先輩が東医精神を説いておりました。

私はのんびりとした地方の旧制高校から私立の医科大学へ来たせいもあって、本学の初印象は期待に反して小型の大学であること、設備も完璧とは言えないものがある、との感をいだいてファイトが湧かなかったものです。ただ同窓意識が強くて良い意味で結束が堅いこと、学生が何となくのんびりおっとりしており、圧迫感がないことなどが唯一のとり得と思っておりました。しかし慣れるにしたがって自分の性格にも合い、官立にない良い点も見出され、次第に学生々活の楽しさが取り戻せたように思います。

さて、学生時代をふり返って印象に残ることを二、三思いつくまま述べてみたいと思います。当時学生活動は学友会が主体となり、学校当局と協調しつつ行なっておりました。初代の白石和委員長が常に学生の中心でした。学友会の委員長は一年交代なので黒田惣一郎氏、相沢尚夫君と引き継がれましたが、相沢君が途中辞退したため塚崎鴻君が委員長に就任して学友会の会則を変更しております。この会則はたしか私の作ったクラス案をもとにしたもので、学友会の明朗化をうたい会計監査の項目を新たにしたものでした。

昭和二十九年、日本の医学生を代表して福田賢司君が渡米することになり、学友会が募金を計画し、佐藤美子、芦野宏の「シャンソンの夕」を第一生命ホールで行ない旅費を捻出しております。この会は音楽に飢えていた学生に好評で、極めて盛会でした。一年生で音楽事務所と関係のあった宮崎秀樹君と、文化部代表の鈴木威男君の骨折りには学友一同感謝したものです。この頃から大学祭はかなり積極的で、学外から一流学者を招待して記念講演会形式のものを計画したり、ハワイアンを演奏したり、新橋のフロリダを借りてダンスパーティを開いたり、結構楽しくやったものです。一方スポーツも盛んで、クラスの大半が幾つかの部をかけもちで活躍、サッカーでは鈴木義昭、指田勢郎両君のように都内の有名大学から誘いがかかるくらいの選手がいたり、廻神輝家君のように硬式野球のリーグ戦男がいたりしました。

この頃のことですが、病理の佐々助教授（現教授）の時間に、関東サッカーリーグの入替え戦があり、五部で優勝の本学が四部と戦うことになり、一チーム十一名のメンバー中九名が私のクラスから試合に参加するので休講を申し入れたところ、佐々先生は学外授業をするからと全員を東大グランドに引率され、声援されたのを思い出します。

私の学生時代にあったことでは以上のほか、従来の東京医科大学新聞が、大学ならびに同窓会当局と意見を異にし、学生新聞として再出発したこと、インターンの身分保証制度確立のため、各大学と連携の上国会デモを行なったことなどです。しかし、思想面では極めて穏健な立場をとっておりました。

さて、この機会に忘れ得ぬ諸先生方のことを回顧してみると、クラス会でいつも話題に出るのが数学の木村教雄先生です。先生は極めて厳格なお人柄で、予科長をされた関係もあり、学生の一人一人の性格や動向をよく知っておられ、学生からは恐れられていたと同時に生活の面でも懇切丁寧に指導されたので敬愛されてもおりました。人づてに聞いたところでは、及落判定の教授会では最もラジカルな教授で、成績不良者に対しては厳しく、落第者が決定するや、その大半が数学の成績不良者ということもあって、自己の教育の足らざるを恥じて涙を流されたと聞き、感激にひたったものです。後日先生は「君たちの時代は叱り甲斐があった。叱ればその日から成績があがるので楽しみだった。」と述懐しておられ、学生を愛し、学生を理解しようとしていたのがうかがわれます。クラス会で先生に感謝の会を開こうなどと話し合っているのは、この時代の学生の多くの気持です。

緒方学長のあと清水茂松先生が学長になられましたが、先生は小数グループの要請にも気軽に応じられ、クレンペルの内科診断学を講義されて、学問の向上を学生の基礎的な面から成長させようと努力しておられました。この意味では薬理の原三郎教授がいかにも大学らしい雰囲気で講義され、学生から評判のよかったのが印象に残っております。後日私が薬理学教室に入り薬理学を天職にするとは思いもよらないことでしたが、原先生が重厚な講義のほかに歌人として東医短歌会を主宰され、学生の文学愛好者が先生のところへ出入りしていたのも、いろいろな意味で刺激になったのだと思います。

同窓教授では解剖が佐野幹先生で、新しい教育方針としてスライドを用いて講義され、図表を張りめぐらして講義をするほかの教授とは異なって新しい感覚をもっておりました。しかし部屋を暗くするので眠気には抗し難く、よくあちこちで鼾をたてては竹の鞭で頭をこずかれ、われわれをよく爆笑させたものです。同じ同窓出身の教授でも生化学の三坂教授の几帳面さとは随分違うところがありました。臨床では馬詰嘉吉先生が眼科総論を講義しておられたが、熱のこもった中にも丁寧な講義であったように思います。馬詰先生の作られた講義ノートは実に整理がゆきとどいていたので学生が先輩より借用してこっそりガリ版印刷してクラスに配ったので助かった記憶があります、外科の篠井教授は出身教授のホープとして学生の尊敬の的だったためか、なかなか人気があり好評でした。一方では田林教授のように丹念にノートを読まれた先生もありましたが、田林先生の講義は途中看護婦がお茶を捧げて来て机上にのせ、一服されてからまた大声で講義されるのをわれわれは教授とは偉い者だとの印象を受けたものです。今日の教授からみると昔は権威があったものと思います。これらの先生方はわれわれが学生時代既に理事の重鎮として学内外の同窓から主柱として仰がれていた佐々一雄理事長とともに、本学創立の当初から活躍され、大学とともに歩まれた風格ある方たちで、教育と経営に苦労されご多忙であったにもかかわらず、個人的にも多くの薫陶を受ける機会を作って下さったのは、やはり同窓という立場にあったためと思います。また、他学より招聘された小宮悦造先生や加藤勝治先生のように血液学を本学の特徴とするよう努力された方たちに対する尊敬の念など、これらの思い出は若き日の正義感や純真だった学生時代を思い起します。

同窓によって創られた創学の精神は新しい時代に即応した感覚で踏襲すべきで、本学に学びあるいは本学にいて生活する人たちの至誠と進取と協調を得て理想の大学を達成させるよう期待する次第です。

27　四年制度の頃

内野滋雄（昭和三十二年卒）

昭和二十八年に入学したが、当時の数年間（昭和二十六年大学予科を閉鎖し、三十年進学課程が認可されるまで）は、ほかの大学の医学進学コースで二年間を過してから医科大学を受験する制度になっていた。医科大学は四年制であった。東京医大に対する印象は、受験から入学式、授業開始の頃は、建物の小さななんと貧弱な大学だろうというものだった。入学式は東大久保の第一講堂で行なわれたが、大講堂に慣れていた私は全く情ない気持になった。教室は現在進学課程の研究室がある場所に木造平屋があり、いきなり外から教室に入れた。

入学式ではまず齢をとっている先生が多いのに驚いた。また一般の入学式と違って、創学の経過を原三郎教授から伺ったが、私にはほとんど感動はなかった。要するにその経過だけでは初めての人を感動させることはむずかしいようである。今後ますますその傾向は強まるだろう。母校愛はその後極めて徐々に芽生えてきた。創学の歴史と精神を誇りとするようになったのも何年か経ってからである。

クラスメートの顔もよくわからないうちに学友会委員を選んだが、この時から植木誠也、宮崎秀樹と私の三人が

卒業するまで何かと引っぱり出されることになった。学友会委員会は、生徒数の少ない大学のせいもあるだろうが、大人しい話し合いの形式で、一見ファイトのなさをもっていた。しかしそのあと年々左翼的傾向は増したが、インターン及び国家試験廃止などの議題で活気あるものになり、医学連にも顔が利くようになった。第一回の国際医学生大会に日本代表を送ったのは東京医大で、一級上の高木謙三氏が代表になったが、そのクラスの林源信、小暮文雄両氏がよく世話をされていた。

今でも行なわれているが、新入生歓迎会が恒例になっていた。その頃は東大久保の基礎本館の地下食堂で行なわれたが、柱が多くて困った。ビールは二人に一本で結構足りた。運動部の連中が盛んに誘いかけ、大変に騒がしいものだった。相撲部などは体がよさそうだと強引に名前をメモし、新入生の迷惑そうな顔はおかまいなしだ。

講義で想い出に残るものは多い。生理学の久保盛徳教授は「これは余談ですが……」と言って常に脱線されたがこれが実に楽しかった。生化学の三坂亮雄教授は大きな字を黒板に書くのが得意で、必須アミノ酸をアメフリヒトイロバトと教え、必ず試験にも出た。解剖学の佐野幹教授は恐い先生だと聞かされていたが、全身骨格のスライドをみせ「ここにネックレスがかかるんです」と言って笑わせ、必ず試験には門脈が出た。薬理学の原三郎教授は熱っぽい講義で実習もガッチリやられた。サルファ剤と抗生物質の作用機序が試験の山だった。外科学の篠井金吾教授の講義は立派で理解しやすく、また実際的でもあった。時には「急性乳腺炎の原因にエーマンが嚙むというのがあります」などと言って学生を大いに喜ばせた。学長清水茂松教授の小児科も楽しかった。ユーモアを交えそれでいてスピードがあった。ポリクリで一番しぼるのは内科の梅原助教授で、こうまで言わなくてもいいだろうと思うほどやられた。婦人科は大学病院ではポリクリ生の出る幕がないので、希望者を集めて都立豊

島病院の婦人科に行き中尾芳郎先輩のお世話になった。

学外はどうかというと、入学した昭和二十八年のメーデーは全く平穏だったが、早大の学生が、「徳球に栄光あれ」というプラカードを持って新宿をねり歩いていた。この頃の新宿はまだ二丁目の遊廓も栄えてあり、初めはひどい所に大学があるものだと驚いた。また新宿西口にも屋台がならびパンパンが横行し中にはオカマも交って盛んに客を引いていた。お客はほとんどがアメリカの兵隊で、連れ立って歩くパンパンがいかにも得意顔をするので腹立たしかった。ギーゼキングやコルトー、ダミヤ、ルイ・アームストロングなども来たし、ルーブル展が開かれたりした。公衆衛生の見学で新宿帝都座の冷房装置をみに行った。全館冷房も当時はまだまだ珍らしかった。この頃はどこでも学生のダンスパーティが盛んで、東医でもいろいろなグループが主催した。原教授、大高教授、野崎教授、桜木助教授も時には顔をみせておられ、楽しいものだった。

どのクラスでも切実な問題として出席制度が取り上げられていた。全廃論と存続論が相半ばしたが、ある年、学生が全廃の決議をし、もし大学側が蹴ったなら白票を出そうとまで申し合わせたが、結局学生側の結束がくずれ、毎年問題になりながらいまだに出席制度は続いている。

修学旅行という時に、三日間を旅行に当てるよう佐野幹学務長に交渉したが、どうしても二日しかくれない。修学旅行に三日も休講にするとは何事だと言うのだ。この頑固さがよくて解剖に長くいるようになった。

卒業謝恩会は新装の東急文化会館で行なった。小宮悦造学長が加藤勝治教授に「英語でスピーチをしてやれ。解っても解らなくても……」と野次っていたことが忘れられない。とりようによっていかようにでもとれる。

創世と守成いずれが難きや――これからの五十年を考えると想い出ばかりに耽ってもいられまい。

28　医学進学課程を思う

堀部　真広（昭和三十七年卒）

東医学園五十年の歴史経過において、草創時代以来、東京医専および同専門部、旧制医大の時代を経て、今日まで一貫して本学関係者全員が共通して志向したものは一体何であったろうか。

六年制医大として現在の東京医大、東京医大病院および東京医大大学院の存立を可能ならしめた大先輩諸先覚の青春時代の理想とその力量は真にこの命題の大前提であったに違いない。

筆者らのクラスは昭和三十一年に新設の医学進学課程第二期生として本学に入学、昭和三十七年に卒業した。本学の最たる発展、開花の時期にそこに在籍し得たクラスはわれわれを含め、その前後の学年であることは東医五十年史にみる通りであろう。

「新宿育ち」なる言葉には一面青春の持つ限りない発展への可能性を秘めているもののごとくでもある。われわれは大先輩たちが五十年を費やして築きあげた東医学園の息子たちとして新宿に育ち、医学生としてそこから巣立ったと言えよう。入学のころの進学課程は東大久保の本学の本拠地の一画にある木造教室で営なまれたが、

質朴な中に活気が溢れていた。

かつて記念会館の位置にあった学生ホールでの新入生歓迎会ではビールで乾盃する慣例や、ヒポクラテスの校歌の響きに接した。そこで「東医学園らしさ」を感じたのは筆者独りではあるまい。

当日のハワイアンクラブの演奏の明るさはその頃のこの学園のリベラルな空気の一面を想わせた。

柏木に「近い将来完成予定」の東京医大病院外来本館の模型図の展示を見ながら、われわれの医学修練の場の一部がそこにすでに設定されていることの説明をきいた。旧淀橋病院とのスケールの違いをきかされた。創立五十周年記念日までにその設定は見事に具現されて、あの新入生歓迎会の日の大学当局者や大先輩たちの自信に満ちた自負は当然のことであることを知った。続いて中央病棟、図書館、基礎一号館が完成した。遅れて学部二年から三年にかけての頃に南病棟、同窓会館が築かれていった。そこに終始いあわせたわれわれの毎日に建設の槌音が絶えた日を知らないほどであった。創立四十周年記念日の前後には当時の清水茂松学長の柏木第一臨床講堂での学生への記念講演において「医人と文芸作品殊に土生玄碩の事蹟」やロート根エキスのことについてを聴いた。束縛も強制もなく進学課程時代のわれわれまで自然にそこに集まって上級生に加わって傾聴した。当時のわれわれには学園が真にリベラルな空気に包まれていたことを感じとることができた。クラス主任は哲学の高間教授であったが、そのこととは無関係に、われわれは自由選択科目としての哲学や文化人類学、心理学、倫理学、経済学、政治学、社会学、文学などを聴講し、そしてクラブ活動に参加し、あるいは学外に出ては新宿の探訪も試みた。のどかすぎる面も多かったが、それが豊かなる余裕とも思えた。東医五十年の中において本学が発展につぐ発展を続けている時に遭遇したことのわれわれへの影響は将来に反映されるであろうことは疑がう余地もな

いが、ともあれ医学進学課程は六年間の医学課程の生活において実に三分の一の時間を占めており、われわれはこれが貴重な時期であったことを忘れたくない。東医五十年との関係においてその意義が何であるかは第二の命題となるであろう。

重複するようだが創立四十周年記念行事はわれわれの医学進学課程時代即ち昭和三十一年十一月初旬に行なわれ極めて盛大であったことが印象にのこっている。全学生及び教授陣揃って奥多摩氷川への遊歩兼祝賀会を行なった。講演会では先の学長の他に文学の川副講師の「近代文学における女性像」の講演もあった。社医研、児研の研究発表、国際ゼミ出席者帰国報告会、山葉ホールの音楽会、高輪プリンスホテルでのパーティ、そして産経国際ホールでの祝賀会に、わが医学進学課程の学生達は率先して参加した。昭和三十二年二月五日、上州榛名湖へスケートを兼ねてクラス旅行を行なった。当時の医学進学課程でのわれわれの様子は昭和三十七年卒業「記念アルバム」にその概要の一端をうかがうことが出来る。本学の前途を誤ってはいけない。大いなる無駄に見まがう程のゆったりとした医人としての人格陶冶の場としての医学進学課程の機能とその時期を大切にしたい。

29　大学昇格後十五年前後の学友会の改革

小林　肇（昭和四十年卒）

〝東京医大創立五十年史〟編纂に当たられている原名誉教授より昭和三十八年度に学生会委員長であった小生に〝当時の学友会について〟と言うテーマで投稿するよう依頼を受けた。この年度は学内外における学生自治活動に目覚ましい発展があり、東医学生会史に画期的な足跡を残したと言っても過言でない。顧りみてその具体例の二、三を記してみたい。

東京医大の学生組織は学友会の名のもとにクラブ活動を行なう三部会（体育会・文化会・新聞会）と学生自治活動を中心とする学生会の二つの組織があり、おのおの委員長および各役員をおき、別個に運営されてきた。従来より三部会活動は活発で東日本医学生体育大会その他対校試合において部門によってはかなりの成績を残し、かつての〝東医ここに在り〟の意気を遺憾なく発揮していた。しかし学生会活動においては学内外ともきわめて消極的で、年間の活動方針を決定すべき学生総会も出席者が少なく、定員不足のために開催できず幾度も流会すると言った惨状であった。事実昭和三十六年細谷晋、三十七年青木正男各学生会委員長も辞任に際して、学生個

個の認識不足、意識の低下を指摘し、これが学生会活動の足を引張る主要因であり、初志の目的を充分に果せなかったのは残念であると述べている点からもいかに学生活動が低調であったか……。これは学生会組織活動のPR不足が仮りに非難されたとしても活動に対して個々の学生が余りにも無関心であったためであろう。

そもそも自治活動自身が勝利とか敗北とか言った目前の結末を期待できない地味な面が多く、現代風に言えば〝カッコよさ〟がない点、全学生が関心を持たねばならないと言った具体性のない抽象的なテーマのとり上げ方、自治活動の究極がどうしても大学当局への要求、時には対立といった形をとることが多いために大学側から目をつけられたくないと言った消極性、一般に学生運動と言うと急進的で左翼的思想をもって危険な行動に走るのではないかと言った偏見からくる保守性、裕富な家庭で育った子弟が多いためか困難なことにあえてとび込みたくないと言うような easy going な自己中心的な発想からくる消極性等々その原因として考えねばならない。これら総ては、単に学生側だけの問題でなく、現状をいかに維持するかと言うことにのみおわれて根本的な問題について取りくもうとしなかった大学当局にも言えるのではないか。そこで私は活発な活動を行なうにはこれら数個の学生を啓蒙すると同時に学友会組織自体にも欠陥があり、自からブレーキをかけているのではないかと考え、委員長就任に当り学内的には現行学友会規約を改正し学生会委員長を公選とし組織の一本化を図ること、対外的には全国医学生連合（医学連）への積極的参加を重要な二大スローガンとした。学友会規約改正は言わば憲法改正とも考えられる重要ではあるが、非常に困難でありかつ慎重を要する問題であり、過去数年、総会に提出されるも研究不充分で否決の憂き目をみている、いわくつきの懸案であった。

学友会の下に存在する学生会、三部会並立の現行規約の機構の複雑さ、不合理さ、また予算分配の不合理さを

指摘し、従来の並立をやめ、三部会の上位に学生会をもって行くことにより学友会→学生会→三部会という一本の線にまとめることにより、大学祭、東日本体育大会、医学連、各医学生ゼミナールその他全学的な行事を全学生の協力を得て強力に遂行するには、規約を改正することがいかに必要であるかを、委員会は全精力を傾けてPRした。現行規約の中で学生会委員長は専門三年からの推薦者が自動的に承認される機構であったが、三十六年頃より委員長選出方法について批判の声があり、全学生の投票による民主的な選出が望まれてきた。そこで前記規約改正とこの委員長公選制をスローガンにかかげた学生総会においては各委員諸氏の熱心な説明が効を奏してか例年にない盛り上りをみせ、提案した二大問題は圧倒的多数の賛成を得、過去数年間にわたった懸案事項は解決された。

次にこの年度の活動で医学連対策を忘れるわけには行かない。医学連は本来インターン制度の検討などを目標にして発足した医学生の全国的組織である。しかるに昨今の医学連の活動をみるに当初の目的を全く逸脱した感があり、過去の学生会はこのような動きには同調し得ぬとして非協力を越えむしろ脱退すると言った意見が多数を占めるような状態であった。しかし医学連が本来の機能を充分に果していないことを認めても脱退するのでは正に無責任な消極的態度と言わねばならない。本来の姿に戻すべく積極的に協力し、そのうちで道の誤りを指摘すべきであると考え、医学連の実態を把握しその政治的偏向の有無を知る目的で従来にはないほど力を注いだ。医学連大会は例年東大、京大、北大など国立大学の代表が主導権を握り、派閥、権力争いさえみられた。東医大代表は私学としては初めてこれらの誤りを強硬に指摘し全国医学生の良識を喚起し注目を集めた。その結果医学連の正常化をなし得たと言っても過言ではない。その後専門二年槍田君を中央委員に送り出し医学連における東医

の地位向上に貢献した。また医学連主催の医学生ゼミナールは岡山大で開催され、遠方にもかかわらず多数の学友が出席し、特に社医研は当時医学的にはもちろん社会的な問題にまで発展した〝血液銀行のあり方と供血者貧血〟をテーマにとり上げその特異な問題提起に注目を集めた。以上記したほかに学内的には大学祭、食堂問題など種々な問題をとり上げ、全学友の協力を得た。

最後に三十八年度学生会が行なった仕事のうちその功績として高く評価されるものは、学生会委員長公選制を含めた学友会規約の改正と医学連へ積極的に働きかけたことであり、従来からあった本学の無知無関心から脱皮し、東医学生会が学内外における活動の基盤を敷いたと言うことに結論されよう。